

清末小説から 113

2014.4.1

いくたびかの阿英目録 5 樽本照雄 1

《李代桃僵》の原作..... 渡辺浩司 8

周作人漢訳ヨーカイ・モール 1 『匈奴奇士録』の英訳底本について..... 樽本照雄 17

徐兆璋日記中の近代小説與出版史料 2 ——以小説林社為中心..... 樂偉平選註 22

早期漢訳ドーデ「最後の授業」 2 胡適訳「最後一課」のばあい..... 神田一三 26

清末小説から 7、35

『清末民初小説目録 第5版』の訂正表を公開しています。渡辺浩司氏ご提供の資料も挿入
<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto/v5.pdf> をご覧ください。現在も増補訂正作業を継続中

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録 5

樽本照雄

黄俊東の「晚清戯曲小説目」紹介

黄俊東『現代中国作家剪影』(1972)*20があることを思い出した。

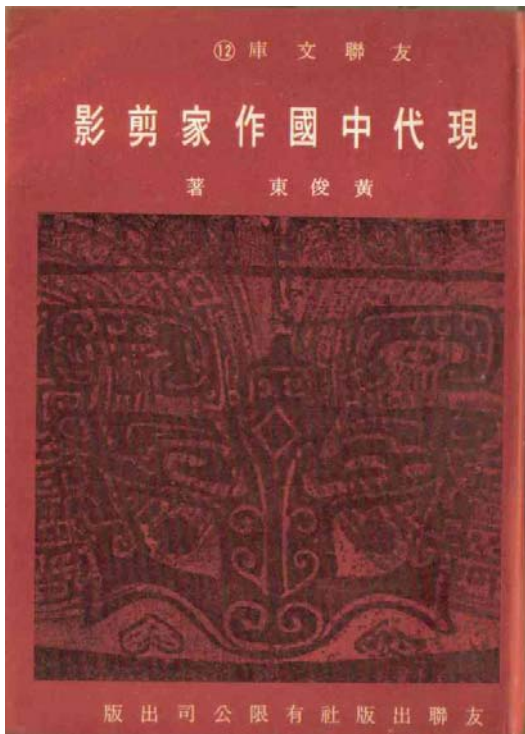
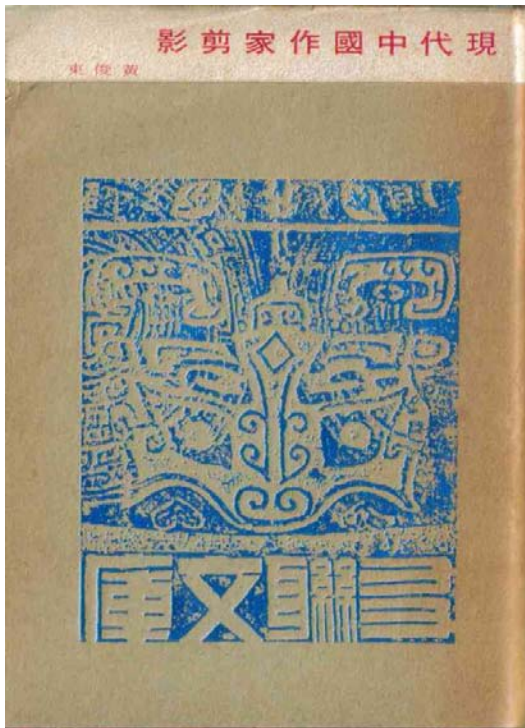
該書が出版された1972年といえば、中国大陸では「文化大革命」がまだ進行中だ。大陸の政治的混乱が原因で各分野の生産活動はほとんど停止している。出版

社も例外ではなかった。政治闘争にかかりきりで出版どころではないのだ。大量の毛沢東関係、いくらかの魯迅関連書、それに少数の現代小説くらいがくり返し刊行されていた印象しかない。香港では過去の刊行物の複写本ばかりが高値をつけて印刷される。そういう状況のなかで香港から新刊が来た。

『現代中国作家剪影』という書名が示すとおり、作家と作品をめぐる随想である。新聞雑誌などに掲載した短文を82篇収録する。日本の文庫本とほぼ同型の単行本だ。珍しく感じた。今見れば2冊が重複して書架にある*21。

阿英をめぐる短文が見える。「三十二、専攬文化史料的阿英」「三十三、「夜航集」」「三十四、「晚清小説史」」に続くのが「三十五、「晚清戯曲小説目」だ。

最初に、1954年の初版と1957年の補遺



帯付き(上)と表紙カバーをはずした状態

をつけた版本が出たことを説明する。以下は、大要、あるいは彼による評価である。

阿英は蔵書家であって中国国内にそれをを超えるひとがない。その目録は詳細である。彼の息子銭毅が校訂し、戯曲部分も充実している。ややもすれば軽視されがちな石印鉛印本を主としている、などなど。創作と翻訳にわけ、単行本をおもにしてかたわらに雑誌を収録する。

阿英目録の特徴を要領よくまとめていると思う。

黄俊東は最後に、前後2版で印刷数が3,800冊であると書く。それは、初版が2,000冊(増補版奥付には「印3,000冊」と誤記する)に増補版が1,800冊であるのを合計した数字だ。増補版奥付の誤植にまどわされていないのがよい。

当時も、それ以後も『晚清戯曲小説目』を超える目録は編纂されなかった。比較対照する目録が存在しないという意味だ。黄俊東の文章が、紹介にとどまる理由である。

阿英目録がいわば独占的地位から退くのは、清末小説研究会『清末民初小説目録』(1988。樽目録初版と略称)が出てからだ。これでようやく客観的に阿英目録をながめる、つまり評価することが可能になった*22。

阿英目録の誤記 刊と本

「刊」と「本」についてくりかえす。阿英が彼の小説目で使用する「刊」は、出版社が刊行した単行本を示す。「本」は、雑誌新聞の掲載だ。両者は、基本的

に区別されている。

ほかに、傍線の引き間違い、引き忘れ、あるいは漢字の誤用がいくつか見える。上の『老残遊記』神州日報館版の誤記を除いて、ざっと見て私が気づいたのは以下ようになる。網羅はしていない。多いか否か。その判断は人によって分かれるだろう。

誤	正
[阿英67頁13行] <u>新世界小説社</u> 報本	<u>新世界小説社</u> 報本
[阿英68頁6行] <u>漢幟</u> 本	<u>漢幟</u> 本
[阿英73頁10行] 又繡像小説本	又繡像小説本
[阿英74頁9行] <u>遼社</u> 本	<u>遼社</u> 刊
[阿英75頁13行] <u>新説林</u> 印	<u>新説林</u> 本
[阿英76頁11行] <u>時務報</u> 印本	<u>時務書局</u> 刊
[阿英102頁4行] <u>小説林</u> 社本	<u>小説林</u> 社刊
[阿英103頁2行] <u>商務印書館</u> 本	<u>商務印書館</u> 刊
[阿英103頁13行] <u>小説林</u> 社本	<u>小説林</u> 社刊
[阿英104頁1行] <u>小説林</u> 社本	<u>小説林</u> 社刊
[阿英106頁5行] <u>小説林</u> 社本	<u>小説林</u> 社刊
[阿英109頁7行] <u>大陸</u> 本	<u>大陸報</u> 本
[阿英117頁6行] <u>改良小説</u> 社本	<u>改良小説</u> 社刊
[阿英131頁14行] <u>改良小説</u> 社本	<u>改良小説</u> 社刊
[阿英154頁2行] <u>香港 中国日報</u> 訳印	<u>香港 中国日報</u> 館訳刊
[阿英174頁5行] <u>広智書局</u> 本	<u>広智書局</u> 刊
[阿英175頁11行] <u>大同書局</u> 本	<u>大同書局</u> 刊
[阿英176頁2行] <u>河北 粹文書社</u> 本	<u>河北 粹文書社</u> 刊
[阿英176頁6行] <u>明達学社</u> 本	<u>明達学社</u> 刊

どうして以上のような誤記が出現するのか。原稿の誤りか誤植なのかは、判別

できない。判断の優先順位は、「刊」「本」が傍線より上位にあるか、と最初は考えていた。だが、上のように拾い集めて示してみると、そうだとも言い切れない。

抽印本の存在

[阿英76] で紹介した「老残遊記」の「天津日日新聞本。1冊」と似た例がある。こちらは、切り抜き本だった。

以下に見るのは、新聞雑誌の掲載であるにもかかわらず「本」ではない。単行本を意味する「刊」を使用している。なにげなくながめると、阿英の誤記ではないかと受け取りそうになる。しかし、阿英目録は、そのなんでもなさそうな部分に特別な情報を含ませている。阿英自身は、説明をしていない。私が注釈をほどこして、以下に掲げる。

- [阿英 86頁 8行] 同文滬報刊 「刊」は単行本の意、『同文滬報』からの抽印本か
- [阿英 89頁13行] 小説図画報刊。2冊 「刊」は単行本の意、『小説図画報』からの抽印本
- [阿英 90頁 5行] 輿論時事報刊。2冊 「刊」は単行本の意、『輿論時事報』からの抽印本
- [阿英 96頁 9行] 輿論時事報刊。2冊 「刊」は単行本の意、『輿論時事報』からの抽印本
- [阿英110頁 6行] 中外日報刊 「刊」は単行本の意、『中外日報』からの抽印本か
- [阿英116頁10行] 国風報刊 「刊」は単行本の意、『国風報』からの抽印本か
- [阿英119頁12行] 江西刊本 「刊本」は単行

本の意、『江西』からの抽印本が
[阿英122頁10行] 国風報刊 「刊」は単行本
の意、『国風報』からの抽印本が

波線だから新聞雑誌に掲載されたとわかる。ところが、これに単行本を示す「刊」がついている。矛盾するように見える。だが、実は矛盾していない。可能性を追求していくと、出版に別の形態があることがわかってくる。

冒頭の例だ。版元が『同文滬報』にもとづいて作成した抽印本であれば、上の表示は不思議ではない。ほかの例を見て、特に「冊」が明示してあるばあい、抽印本だと理解する根拠のひとつとなる。

なんども出てきた抽印本だ。念のため簡単に説明する。

雑誌という新しい媒体が出現した。それにともなう新しい出版形式だといっている。

短篇小説は、読み切りだから基本的に1回で掲載終了だ。問題はない。ところが、長篇作品はそうはいかない。ある程度の期間にわたって分断掲載する必要がある。迫られて工夫したことのひとつがページ単位での分断掲載だ。

作品、あるいは作者によって異なるだろう。はじめから原稿がそろっているもの、あるいは連載を継続しながら執筆が並行して進行しているものもあるはずだ。どちらにせよ、連載の最初から、あるだけの原稿はすべてを活字に組んでおく。雑誌に掲載するとき適当に分断掲載するのだ。あとで1本にまとめれば差し障りはない。文章の途中であっても、うち切

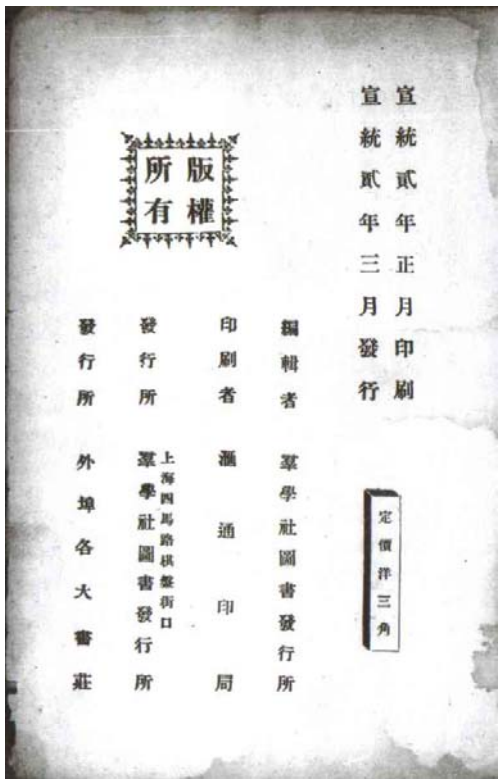
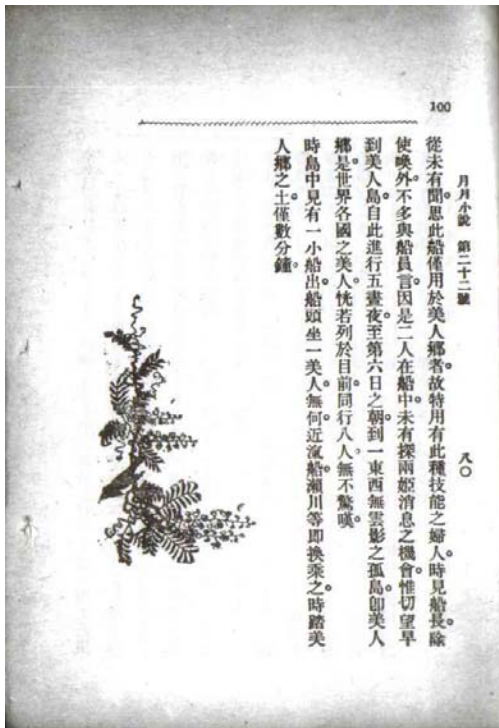
ってしまう。適当な頁数で中断させる。最初のころは、誌面に空白が出ないようにしたかったらしい。あくまでも出版社の都合で分断する。読者は文章の途中で切れているからとまどったことだろう。個人で作品ごとに製本しなれば単行本と同じ形態になる。

さすがにそれでは雑誌を読む人たちには不親切だと理解したか。のちには、回、章でまとまるように組版を変更した。誌面に空白が生じるが目をつむった。こちら、最終的にはその作品だけを抜き出して製本することができる。これを抽印本という。

たとえば、『月月小説』に連載した同一作品を抜いて1冊にし、上海・群学社が刊行する。こちらは、出版社が販売する目的で作成する。当時では普通にみられる形態だ。

あらたに表紙と奥付(定価を印刷)だけ





実藤文庫所蔵『美人島』1910表紙(前頁)、本文柱に月小説とある(上)、奥付(下)

をつけて「説部叢書」と表記する。その量は、少なくはない。これは販売するから単行本あつかいだ。

『繡像小説』連載作品を抽印本にしたものもある。上にかかげた作品もその類だと思う。

『涵芬楼新書分類総目』には、市販していない手製の抽印本まで掲載している。これも見本のひとつだ。

引用途中での錯誤 民国報本

阿英が使用した傍線は、引用される途中で誤解が生じる。阿英目録が雑誌からも作品を採取している事実を知らない。これが原因のひとつである。その結果は、見ている奇妙なものだ。見本をひとつ示す。

[阿英174] 混沌国 樸庵著。宣統辛亥(1911) 民国報本。

阿英目録の補遺に記録された。『民国報』という雑誌に掲載されたと読める。「報」だから新聞というわけではない。雑誌形式のものもある。『清議報』『新民叢報』『小説時報』などはその種類だ。波傍線と「本」1字が手がかりになる。ただし、号数は示されていない。これも誤解が生じる原因になった。

私が利用する雑誌目録は、主として次の2種類がある。書誌情報を相互参照するためだ。

ひとつは、上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』全6冊(上海人民出版社1965.12 / 1980.7-1984.8)である。ちなみに、収

録した時期と刊行年を示しておく。

(1) 1857-99年分 1965.12 / 1980.7第
二次印刷

(2) 1900-03年分 1979.10

(3) 1904-07年分 1981.6

(4) 1908-11年分 1982.2

(5) 1912-14年分 1983.8

(6) 1915-18年分、補編 1984.8

もうひとつは、祝均宙、黄培璋輯録「中国近代文藝報刊概覧」1、2(魏紹昌主編『中国近代文学大系』第12集第29巻史料索引集1、2 上海書店1996.3、7。注意点：雑誌の目次にもとづいて採取している。本文にある原著者などを取りこぼしている理由だ)である。

両者に重なる雑誌もある。だが、互いに補完しているから便利だ。なによりも記載情報の信頼性が高い。私はそう理解する。

彙録4には、つぎのようにある。

[彙 3386] 小説 渾沌国 『民国報』第1号 1911年11月21日(黄帝紀元四千六百九年辛亥十月初一日)

阿英目録にはなかった号数と詳細な刊行年が判明する。また、「混」が彙録では「渾」だ。通音する。阿英目録は「混沌」である。実物を見ていないから表示されたままを写すしかない。

のちの小説目録は、阿英の記述をそのまま引用するものがある。しかたがないことだ。それなりの編集方法だといえないこともない。ただし、典拠資料として詳細には示さない。そのばあいは、信頼性が劣る。

以下に言及のある目録、文献をあげる。老若男女、国の内外を区別しない。私は中国の学界にとっては外国人だ。域外の者は、実質的に人的関係をもたない。遠慮する必要はないのだ。ゆえに原則として中国人研究者の実名を掲げる。これが本稿における私の基本姿勢である。誤記した箇所だけを引用するか、と立腹する学者がいるかもしれない。お互い様、と答える。余計なことかもしれないが、記しておく。

江蘇省社会科学院明清小説研究中心編『中国通俗小説総目提要』(北京・中国文聯出版公司1990.2 / 1991.9再版)がある。

提要1248頁(署名は仁。人、すなわち匿名という意味だろう)は、大きく「未見」と書く。阿英目録を引いているから「混沌国」とする。「《民国報》本」と記述するのも、もとのとおりだ。いうまでもなく、雑誌『民国報』に掲載されたことを意味する。ところが、引用したといっても、傍線は省略した。それが後に誤解を引き起こす。

時間が経過すると、細部が理解できない編者が出てくる。その人が目録を編集する。

前出韓錫鐸、王清原、牟仁隆『小説書坊録』(北京図書館出版社2002.4)だ。

収録される作品は、当然ながら単行本である。だから、雑誌は含まれないはず。

ところが、[書坊訂1023]では、「宣統三年印行《混沌国》」と書いて掲載する。「印行」が余計だ。そこまでは、拠った『中国通俗小説総目提要』とほぼ同じ。しかし、出版社を民国報としている。

書坊、つまり出版社だと誤解した。

阿英が雑誌だと記述しているにもかかわらず、書坊(出版社)に変身した。もとは施されていた傍線が、引用途中で消失してしまった。これが誤りの原因だと思われる。

もうひとつ重大なのは、阿英が使用した「本」と「刊」の区別が、この時点で編者にはわからなくなっていることだ。さらにいえば、阿英目録が雑誌からも作品を収録している基本を忘れている。長期間、阿英目録が利用されているわりには、あるいはだからこそ誤解が発生している。これは利用する研究者の問題だ。

阿英目録が示す作品名の「混沌国」は誤り、「渾沌国」が正しい。そう指摘するのは、陳大康「《中国通俗小説総目提要》“未見”条目之補遺」(『明清小説研究』2013年第1期(総第107期)2013発行月日不記。176頁)だ。『中国通俗小説総目提要』が「未見」とした作品群を追求した論文である。高く評価されるべき業績だと私は思う。実物を見る人はちゃんとみている。罍

【注】

- 20) 黄俊東「三十五、「晚清戯曲小説目」」『現代中国作家剪影』香港・友聯出版社有限公司1972.12
- 21) 黄俊東の著作は、ほかに『書話集』(香港・波文書局1973.9.15)、『獵書小記』(香港・明窗出版社1979.12)がある。以下は、『朝日新聞』1973.3.27「海外文化」欄の「香港で出版された現代中国作家紹介」による。黄俊東(1934年生)、広東省潮州の人、当時雑誌『明報月刊』の副編集長。
- 22) 阿英「晚清小説目」については以下の文章

を書いた。

樽本「阿英「晚清小説目」の構造」『大阪経大論集』第48巻第4号(通巻第240号)1997.11.15、115-147頁。要約:阿英「晚清小説目」の編集方針は、単行本を主として雑誌に集書範囲をひろげるものであった。しかし、清末が雑誌の時代であったことを考えれば、小説目録の編集方針は、単行本よりも雑誌を主対象としなければならない。その結果、阿英「晚清小説目」の収集が不徹底であったこと、当時の小説全体からすれば、わずかに38%しかカバーしていないことを資料をもとにして証明する。「阿英「晚清小説目」的結構」の日本語版である。論旨、使用資料は同様だが、引用文などが異なる。

樽本「阿英「晚清小説目」的結構」沢本郁馬名で発表。『清末小説』第20号1997.12.1、41-62頁。要約:(中国語)樽本「阿英「晚清小説目」の構造」の中国語版である。論旨、使用資料は同様だが、引用文などが異なる。

- 『清末小説から』第112号 2014.1.1
- いくたびかの阿英目録4 樽本照雄
- 《披蘿帶荔》の原作 渡辺浩司
- 早期漢訳ドーデ「最後の授業」1
- 胡適訳「最後一課」のぼあい 神田一三
- 傅兰雅与小説 刘 德隆
- 徐兆璋日記中的近代小説與出版史料1
- 以小説林社為中心 樂偉平選註
- 清末小説から

《李代桃僵》の原作

渡辺浩司

1

《小説月報》第六巻第五号(商務印書館, 1915年5月25日 - 東豊書店1979年10月影印《小説月報 自創刊號起至廿二巻十二期止》)を使用, 発行年月日は『清末民初小説目録 第5版』(樽本照雄編, 2013年4月15日)によるに、《李代桃僵》なる短篇作品が掲載された。書名下には“鐵樵”とあるだけで、創作のように見える。『清末民初小説目録 第5版』も創作としている(L0740)*¹。しかし、この作品は実は翻訳なのである。このたび、原作が判明したので本稿で報告する。

原作は『A Madonna of the Cells』、原作者は Morley Roberts、掲載誌は『The Strand Magazine』 Vol.46-No.273(George Newnes, 1913年9月)。

原作者 Morley (Charles) Roberts は、1857年生、1942年没、ロンドン生まれの英国作家で、様々な分野の80冊以上の著作がある。

訳者“鐵樵”は、同誌編集責任者でもあった惲樹珏で、原籍は江蘇常州、1878年生、1935年没。

2

原作『A Madonna of the Cells』のあらすじを紹介する。

法廷弁護士 Mark Nugent の所へ Smith, Taylor, and Broadwood 商会の事務弁護士 Smith が訪ねて来た。何年もの間、警察裁判所で仕事をしていない Nugent はいぶかしく思いながら、Smith と会った。Smith はそれを承知の上で、翌日女性を弁護するよう依頼した。Smith の話では、女性が彼を指名したとのことだった。弁護する事件とは、彼女が Tilbury の店で財布を盗んだとして逮捕された件だった。Smith は彼に女性と面会するよう頼んだ。彼が理由を尋ねると、Smith は、彼女を何とか救いたい；彼女はまるで若き Sistine Madonna で、Madonna(聖母マリア)の絵が好きで自分としては彼に特別に弁護してもらいたいのだ等と答え、彼女も面会することを希望している等と加えた。Nugent は、目撃者が2人いること；彼女の名が Nina Stewart であること；彼女には病気の母があり、母に知られるのを非常に心配していること；そこで Smith は彼女の母には、彼女は足を負傷して自分の妻が面倒を見ている旨の連絡をしたこと等を聞いた。2人は警察署内の留置場に行き、彼女に面会した。彼女は確かに若くて美しく、また何か懐かしいものを感じさせた。涙を流す彼女に困惑したが、Nugent は「どこで会ったのか？」と自問した。彼女から2人の目撃者の証言を聞き、彼は彼女が盗んだのだろうと思ったが、彼女を見ると、それが真実とは思えな

った。話を聞き終わると、彼は Smith に頼み、彼女と2人にしてもらった。彼が「会ったことがありますか?」等と尋ねると、彼女は首を振り「名前を知っていました; そのうちなぜ貴方に弁護をお願いしたのか話すことがあると思います」等とためらいがちに話した。

彼と Smith は署を出て車に乗った。彼は途中で降り、Smith は彼女の母の所へ向かった。彼は事務所に戻る途中もずっと彼女のことを考えていた。4時前に Smith は彼の所へ戻り、彼女の母の貧しい状況を伝えた。2人は弁護について話し合い、彼が「彼女に似ている女性はいないのですか?」等と尋ねると、Smith は驚いて跳び上がり、興奮しながら Emily Hopkins という女性のことを語った: Hopkins は有名な万引犯で、2回弁護を担当したことがある; Hopkins は彼女にとてもよく似ている等。彼は懐疑的だったが、Smith は Hopkins に協力を仰ごうと考えた。Smith は彼には何も教えずに、1人で警察署に行き、過去に Hopkins と交際していた Raydon 刑事に会った。刑事から Hopkins の住所や最近は何も捕まっていないこと(それは彼女が慎重に仕事をしているという意味だった)、現在は海外に住む恋人の所へ移りたがっていること等を聞いた。Smith は不安を感じながら Hopkins の所へ行った。だが彼女の顔を見て、Nina Stewart と姉妹のように似ているので安心した。疑い深そうにしている彼女に、Smith は、かつて世話をしたでしょう等と切り出し、「20ポンドを渡すので少し助けてくれないか?」等と言った。説明を

求める彼女に、彼は Stewart の名は伏せて、事件のことで逮捕された女性彼女によく似ていることを話した。そして判事の Chisholm 氏へ、財布を盗ったのは自分で、これから海外へ行くという内容の手紙を書くよう言った。彼女が50ポンドを要求すると、彼はすぐに応じ、手紙を書き終えた後、化粧をして写真撮影をする等と言った。彼女は彼の口述通り手紙を書き、専門の所で化粧をした(15分)後、彼の友人の所で写真撮影・現像を行ない(30分)、その写真の裏にも判事への伝言を書いた。その後、彼はニューヨーク行の一等乗船券と共に彼女を出発させた。

判事の Chisholm は慈悲深く評判の良い人物だった。Nugent は Smith から何も知らされず、不安を感じていた。翌日、朝のうちは暗かったが、Nina Stewart が連れて来られた時、空が明るくなり、法廷もそれほど薄暗くはなくなった。彼女が被告席に着きヴェールを上げると、判事は興味深そうに彼女を見た。Nugent は判事のそんな動きを見逃さず、どうしたことなのか考えていた。彼は弁護人として出廷し、Smith が彼に事件の説明をした。最後に入廷した Fortescue 氏が店の代理で彼女を起訴した。まず、財布を盗まれた婦人が証言し、それに対し Nugent が反対尋問を行なった。彼は婦人を気分よくさせるように優しく話し、ついにはその婦人は、被告が財布を盗んだ女性ではないかも知れないと認めるに至った。続いて2人の証人が証言した。Nugent の尋問にもかかわらず、1人は、被告が財布を盗み、隣の売り場で捕まるまで一度も見失

わなかったと主張し続け、もう1人も、彼女を捕まえるまで見失わなかったと証言した。弁護側の状況は悪そうに見えた。証言が終わった時、「緊急」と書かれた封筒が判事の所に運ばれた。それは Smith が Hopkins に書かせた手紙だった。判事はそれを読み、驚いたようだった。判事は「本件に関係する手紙を受け取りました、証拠にはならないが見るべきです」等と話し、助手を通して、Fortescue に手渡した。Fortescue はそれを読み、慙然とした表情になった。Nugent に手渡された。彼は念入りに調べてそれを読み、笑みを抑えることができなかった。彼は Smith に手渡した。Smith は読んで満足したようだった。Fortescue、Nugent、Smith は集まり、相談を始めた。Fortescue が感想を求めると、Nugent は「すぐにわかるでしょう」と言い、Smith は「冤罪は原告にとってもいい宣伝にはならないでしょう?」等と言った。Fortescue は「たぶんならないでしょう」と答え、裁判を続けようと言った。Nugent は了解し、判事に証人への再尋問を求めた。判事は許可し、まず被害者の婦人が再び呼び出された。Nugent は同封の写真を見せ、誰の写真かを尋ねた所、婦人は被告の写真だと答えた。更に1人目の証人が呼び出され、彼も写真は被告だと断言した。もう1人の証人は最初は判断しかねていたが、結局は写真は被告であると認めた。Fortescue は質問しようとしなかった。Nugent は、証人として Harrison 警部を呼び出し、写真を示して「それは被告の写真ですか?」と尋ねた。警部は「いいえ」と答え、写

真の女性は有名な万引犯であることを証言した。続いて、Smith に電話で呼び出された Raydon が出廷し、同様に写真の女性は有名な万引犯であり、また手紙の筆跡がその女性のものであることを証言した。Fortescue は質問することは無いと言った。そこで、Nugent は判事に「被告を犯人とした証言は全くあてにならないので、被告を無罪放免するよう願います」等と言った。判事は少し考えた後、「被告を犯人とする証言は不十分であり、被告は無罪放免されます」等と判決を下した。彼女が被告席を離れた時、Nugent は Smith に「彼女のことを頼みます、判事に話がありますので」と言った。判事も話がしたいようで、彼を手招きした。判事が「彼女について何か知っていますか?」等と尋ねると、彼は「何も知りません」等と答えた。判事は「彼女を見ると、数年前に知り合いだった Stewart 夫人を思い出します、その時、君も近所に住んでいました、覚えていませんか?」等と尋ね、彼は「思い出せません」等と答えた。判事は「何かわかったら知らせてほしい」等と言い、彼は「もちろんそうします」と答えた。

彼が外に出ると、タクシーのそばに立っている Smith が見え、中には彼女が乗っていた。彼女は泣いてはいなかったが、何も話せないようで、ただ彼と握手した。彼は、Smith に任せて彼女を送ってもらおうと考えていた。しかし、判事の話もあり、美しさ以上に訴えかけるものを感じ、考えを変え、自分が送ろうと思った。彼は Smith に送って行く旨を伝え、彼女



"I WANT YOU TO TAKE TWENTY POUNDS JUST FOR WRITING ME A LETTER AND SAYING YOU ARE GOING TO AUSTRALIA."

深明此書發而吾往奧大利亞鴻飛冥冥其人何事焉
如此則君得金而少婦密得免且君儘可今日首途
天壤甚
寬任所
欲往以
吾信箋
亦何樂
不爲董
飲乃低
屈其鐵
指有頃
旋上其
眼簾軒
渠曰君
孤也狡猾乃爾吾當知教又以爾願呵史密司曰吾意
一星期行不遲耶律師微笑曰勿作劇請作書計明晨

大 坎 德 美 欲 君 不 時 即 數 多
坡 那 洲 洲 往 所 問 間 二 十 得 字 字

四十一

に話したいこともある等と加えた。彼女は Smith と握手し礼を述べ、彼がタクシーに乗り込み出発した。車内で礼を述べる彼女に、彼は改めて弁護に自分を選んだ理由を尋ねた。彼女が「名前を知っていたから」と答えると、更に「昔会ったことがありますか?」等と尋ね、彼女はうなずいた。しかし彼は思い出せず、ヒントを求めて昔の住所等を尋ねた。会話するうちに、彼の心に昔の風景が浮かんできた。突然彼は「父の家からそう遠くない所に家があり、それが Stewart 家だった」等と話し始め、当時彼は19か20歳、彼女は12歳にもなっていなかった；彼女は彼の母に彼のことを素敵な少年だと話した；彼はそれを知り、彼女に優しく接

したので、彼女は彼の母に、いつか彼と結婚すると話した等と、会話を交えながら言った。その後、彼は貧しくなった理由を尋ね、彼女は、父が賭け事に手を染め、財産が尽きた時に亡くなったこと；親類も支えてくれる人もおらず、ロンドンに移ったこと；母の病気のこと等を話した。彼は援助を申し出て「私はずっととても素敵な少年でしたから、明日会いに伺ってもいいですか?」等と話した。彼女は承知し、「貴方はとても私に親切にしてくれた」等と言い、涙を流した。彼は彼女の手を取り、「大丈夫です、今は友人もできました」等と慰めた。彼女を送った後、彼は再びタクシーに乗り、Oxford 通りへ行き、「Madonna di San Sisto」の一部「Mother and Child」の複製を購入した。帰宅し、その絵の抱かれている子供を手で隠して聖母の顔を見た。その顔は子供のようだった。手をどけて聖母を見た。母親の顔だった。そしていつかそんな変化が Nina Stewart にも来るのだろうと考えた。その夜、彼は夢の中でも、Madonna のような昔日の Nina Stewart を見た。朝、目覚めても辛い孤独を感じ、元気は無かった。午前中、法廷で仕事をしたが、まだ夢の中にいるような感じだった。午後、彼女の家に行くのは愚かなことだと思ったりもしたが、彼女を愛していることに気付き、そんな愚かさも自然なことだと思った。何が起こるのか、他に意中の人がいるかも知れない等と心配しつつ、彼女の家に向かった。彼女は彼を待っていた。彼はいきなり近寄り両手を伸ばし「Nina - 貴女と結婚したい」と言

った。彼女は理解できなかったかのよう
に彼を見、青ざめ震えながら「できません」
等と叫んだ。詰め寄る彼に、彼女は
「貴方が真相を知ったら、結婚のことは
言わないでしょう」等と言い、彼は更に
その真相とは何かと迫った。彼女は「私
が母のためにあの財布を盗んだのです」
と言った。すると彼は笑って、両手を彼
女の肩に置き「もちろん知っていた
よ！」等と言った。

弁護士に惚れられるほどの美人は、犯罪
も無かったことにしてもらえるので、法的
に得なんだなと思ってしまった。一方で、
絵の中の聖母マリアに似るほどの美人なの
に、盗みをするほどの貧乏になる前に、何
も無かったのかなとも思う。なお、
「Sistine Madonna」= 「(La) Madonna di
San Sisto」は、16世紀前半にイタリアの
画家 Raphael(1483年生, 1520年没)によって
描かれた作品である。

3

翻訳について述べる。他に訳されていた
場合の原作探求の手掛りになると思う
ので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
Mark Nugent	邁克 紐勤
Smith	史密司
Nina Stewart	密娜 司梯瓦特(司梯瓦特)
Emily Hopkins	伊密留 霍欽
Chisholm	吉司好姆

書名について。原作が「A Madonna of
the Cells」(監獄の聖母マリア)としているの
を、中国語訳は“李代桃殭”(身代わりに

なり他人の罪をかぶる)としている。確かに
Smith の策略で、悪名高い万引犯 Emily
Hopkins が Nina Stewart の身代わりにな
るのであるが、Hopkins が主人公という
訳でもないので、物語を表すタイトルと
は思えない。「Madonna」になじみの無
い中国の読者のことを考えた改訳であろ
うが、妥当とは言えないと思う*2。

内容については、物語自体を変えずに、
細かな改訳・加筆・省略が見られる。改
訳を1例挙げる。冒頭の事件の説明の場面
である。

Mr.Smith explained to him that this
particular lady had been arrested at
Tilbury's that very morning for stealing
a purse. He owned that the case
seemed strong against her.(283頁右)

(Smith 氏は彼に、この特別な婦人
は財布を盗んだとして Tilbury の店で
逮捕されたことを説明した。彼はこ
の件が彼女に不利なのはゆるぎない
だろうと認めた。)

曰：“此婦至可怪。今已在監獄中。
所以被拘禁。因盜竊帖爾鄴留夫人錢
袋。自吾意言之。其事頗不易辨
護。”(37頁上, 句点は原文のまま, コロ
ン・引用符は補った, 以下同)

(この婦人はとても変わっていて、
今すでに獄中にいます。逮捕された
のは、帖爾鄴留夫人の財布を盗んだ
という理由からです。私が思うに、
この件は弁護がかなり難しいでしょ
う。)

翻訳は Tilbury を被害者の名前としている。だが Tilbury は裁判開始の場面(290頁右)にも

She was charged with stealing a purse at Messrs.Tilbury's, in Oxford Street.

(彼女は Oxford 通りの、Tilbury の店で財布を盗んだ容疑を受けている。)

とあり、店名である。そのまま訳すべきだと思う。なお、原作は被害者を「the lady」(婦人)と記すだけで、名前は出てこない。

もう1か所、大きく改めている部分を挙げる。裁判冒頭の場面である。

Her name was Nina Stewart. She lived at 119, Waratah Road, Brixton. She was charged with stealing a purse at Messrs.Tilbury's, in Oxford Street. Mr.Nugent appeared for her, being instructed by Mr. Smith, and Mr. Fortescue, who came in at the last moment in a bustle, prosecuted for the firm. After the lady who had lost the purse had given her evidence, Nugent, in cross-examination, succeeded in making her a little less positive as to the identity of the prisoner. This was done, perhaps, not so much by the acuteness of his questions as by the charm of his manner, which was never greater.

He addressed her as if he were a humble admirer of her particular style of beauty, which was, indeed, flamboyant, not to say robust. A tyro in the psychology of the passions would have affirmed heartily that here at last the rising barrister of the Common Law Bar had discovered his ideal. His voice was soft and caressing. He pointed out to the lady how important it was that she should be quite sure in a matter which meant so much to the young lady before her. He showed, indeed, that it was a matter of so much importance to himself, that the lady, who was obviously flattered by the attentions he paid her, began to feel that she would rather swear to anything than annoy so pleasant a gentleman. She admitted at last that she was not absolutely sure that this was the girl who took the purse; she might have been mistaken. She retired with a glance overflowing with admiration at her interlocutor, and for ever afterwards maintained that Mr.Mark Nugent, some time later a K.C., was the most charming man she had ever known.(290頁右-292頁左)

(彼女の名は Nina Stewart。彼女は Brixton, Waratah Road, 119に住んでいる。彼女は Oxford 通りの、Tilbury の店で財布を盗んだ容疑を受けている。Nugent 氏が彼女の弁護人として出廷し、彼は Smith 氏から事件の説明を受けた、そして Fortescue 氏は

慌ただしく最後に入廷し、店の代理で起訴した。財布を失った婦人が証言を行なった後、Nugent が反対尋問を行ない、容疑者の確認について婦人の確信を少し崩すことに成功した。そうになったのは恐らく、彼の質問が鋭かったからではなく、決して巧みではなかったが、彼のふるまいが魅力的だったからであろう。

彼は彼女に向かって、まるでその独特の美しさを控え目ながらも称賛しているかのように話しかけた、彼女の美しさは確かに華麗であり、粗野とは言えないものだった。情熱という心理状態をそれほど知らない者ならば、法曹界の新進の法廷弁護士がここでついに自分の理想に出会ったときっぱり断言したであろう。彼の声は優しく撫でるような感じだった。彼は、前にいる若い女性にとって大きな意味を持つ本件において、婦人が絶対に確かだと言うことがいかに重要なのかを指摘した。彼は、それが自分にとっても実際に大変重要なことだと示したので、彼のとった気遣いに明らかに気をよくしていた婦人は、愛想のよい紳士を怒らせるよりは何でも宣誓して証言する方がいいと思い始めていた。彼女は結局、この女性が財布を盗った女性であるとは必ずしも確信できない；誤っているかも知れないと認めた。彼女は自分の対話者に、称賛にあふれた視線を送りながら退席した、彼女はこれから永遠に、近い将来、勅選

弁護士になる Mark Nugent 氏は自分が会った中で一番魅力的な男性であると、思い続けるであろう。))

旋被告律師紐勤宣言。被告名密娜司梯瓦特。居亨立斯頓瓦拉德路十九號。所犯爲盜密散司帖爾鄒留錢囊。判官乃展視案頭原告所呈證物。紐勤續言。謂果有此舉動。自無人格可言。然盜竊何事。稍知自愛者。宜惜其名譽。以被告聰明。寧不知得不償失。謂彼見金不見人。直非情理。此語雖囹圄。然自是明白曉亮。且紐勤藹吉之詞氣。誠實之態度。侃侃而談。聞者咸爲心許。於是判官無語。原告亦無語。紐勤復曰：“錢囊至細。充其量值金鏘數枚而止。不以貯珍珠鑽石。名譽至鉅。且關係將來。無論密司司梯瓦特上流人。即不自愛而爲盜。必不若是之拙。本席揆情度理。不能得其理由。以爲此中必有謬誤。果原告不能自圓其說。則無理由之控愬。恐不能成立。請堂上注意。其謬點所在。”言至此。聽者皆爲動容。以爲辯護士言是。天下事固不少張冠李戴者。必誤認無疑。問官顧謂帖爾鄒留夫人曰：“何如。”夫人曰：“此事容或有誤。吾固不能堅持。謂女郎必盜吾囊。且密司脫紐勤所言。至可信。吾於王家大學中即識之。其人固足一言解紛。是淺淺者。可勿深究。吾亦被愆患來耳。”言已。退立一隅。舉目環視堂上下。觀審者咸以壽顏報之。若曰。夫人洵明達。方且謂此劇宜閉幕矣。(43頁下-44頁上)

(直ちに被告弁護人の紐勤が宣言した：被告の名は密娜・司梯瓦特で、住所は亨立斯顿、瓦拉德路十九号、帖耳鄺留夫人の財布を盗んだ容疑を受けている。裁判官は机上の原告が示した証拠を見た。紐勤は続けて述べた：もとよりこのような行為には言及すべき品格などありません、しかし窃盗とは何事でしょう、少しでも体面を重んずることを知っているならば、名誉を大切にすることは当然です、被告の聡明さをもってすれば、どうして得より損が大きいのに気付かないことがありますでしょうか、彼女がお金だけを見て人を見ていないというのは、全く理不尽です。この話は大雑把であったが、はっきりわかりやすかった。また紐勤の穏やかな口調、誠実な態度、まっすぐな話の内容により、聞く者は皆賛嘆していた。そのため裁判官は何も言わず、原告も何も言わなかった。紐勤は更に「財布はとても小さく、いっぱいにしてポンド金貨数枚です。宝石類も入りません。名誉はとても大きく、また将来にも関係します。言うまでもなく、司梯瓦特嬢は上流階級にいます。その人が体面を重く見ず窃盗を働くという、そんなバカげたことは決してありません。私が道理から思いますに、それには理由がなく、中に必ずや誤りがありましょう。もとより原告が自らの訴えを説明できなければ、告訴する理由も無いことになり、起訴は成立しないでしよ

う。裁判長、どうかその誤りのある所にお気付き下さい。」ここまで話すと、聞く者は皆表情を変え、弁護人の言う通りだ、もともと世の中には相手を誤ることが多く、本件もきっと誤認に基づくものだ、と考えた。質問の担当は帖爾鄺留夫人の方を向いて「いかがですか?」夫人は「本件は誤っていたかも知れません。私は、この女性が財布を盗んだと確信できなくなりました。また紐勤氏の話はとても信頼できます。私はキングズカレッジで氏のことを知りました。氏は争いを解決するのに一言で足りる。その言葉が積み重なっているのですから、どうして深く考えずにいられましょう。私も説得されました。」話し終わると、隅に退き、顔を上げて法廷を見まわした。見ていた人は皆穏やかな表情で応じ、まるで「夫人は本当に公明正大だ」と言うかのようなようだった、また「このお芝居も閉幕すべきだろう」とも思った。)

原作にはNugentの具体的な弁論は述べられていない。しかし翻訳では現れている。また、原作では被害者の証言を動かしたのはNugentの話術、特に婦人を扱うテクニックによるものとされている。しかし翻訳では全くそれが見えない。創作に近い改訳である。なお、Nugentはbarrister(法廷弁護士)であるから、「K. C.」はbarristerの上位たるKing's Counsel(勅選弁護士)のことで、King's College(キングズカ

レッジ-翻訳“王家大學”)ではない。

4

法廷に立ち、被告 Nina Stewart の無罪を勝ち取り、彼女が昔なじみだと思い出し、好きになって結婚を申し込んだのは、Nugent であるが、実際に一番働いたのは、Smith である。つまり、彼女が聖母マリア(Madonna)に似ていると最初に言及し、Nugent に仲介し、彼女の母にも会いに行きうまく嘘をつき、Emily Hopkins に身代わりを勤めさせるため手配・散財したのである。故に、原作は誰が主人公なのかわからない作品である。2人の働きの違いは、英国の barrister と solicitor の違いをある程度反映しているのであろう。

本誌前号拙稿「《披蘿帶荔》の原作」で採り上げた『The Moth』も Strand 誌 Vol.46-No.273 掲載であった。訳者も同じ惲樹珏で、小説月報誌掲載も本作より 1 号後の第 6 巻第 6 号であった。翻訳は共にすばらしいとは言えないが、ここからも当時の翻訳における Strand 誌の評価の高さがうかがえるようである。 罍

【注】

- 1) 同目録 L0742* には、同じ書名・同じ訳者の翻訳作品が「李代桃僵 / 鉄樵(惲樹珏)訳 / 『説薈』上海・商務印書館1917.8-9」と採録されている。
- 2) 「Madonna」は“羅馬教中女神梅杜娜”(ローマカトリックの女神・梅杜娜)と訳されている(37頁上)。

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》
浙江古籍出版社, 1993年5月

梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代卷》
中華書局, 1997年2月

Michael Cox 編『The Oxford Chronology of English Literature』Oxford University Press, 2002年

T.H.Howard-Hill 『Bibliography of British Literary Bibliographies』(Second edition revised and enlarged)Clarendon Press, 1987年

Sandra Kemp, Charlotte Mitchell, David Trotter 『The Oxford Companion to Edwardian Fiction』Oxford University Press, 2002年(- First published in hardback as Edwardian Fiction : An Oxford Companion 1997)

『Who Was Who among English and European Authors 1931-1949』Gale Research Company, 1978年

『Who Was Who in Literature, 1906-1934』Gale Research Company, 1979年

William G. Contento 管理 HP「The Fiction Mags Index」

<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2014年1月9日確認)

本誌第114号は本年7月1日公開予定

周作人漢訳ヨーカイ・モール1

『匈奴奇士録』の英訳底本について

樽本照雄

周作人が、ハンガリーの作家ヨーカイ・モール(Jókai Mór, 1825-1904)の作品を漢訳している。周知のことだろう。

ヨーカイ・モールといえば、同じハンガリーの詩人ペテーフイ・シャーンドル(Petőfi Sándor, 1823-49)と革命運動に参加したことを知る人は多いはずだ。

周作人がヨーカイ・モールの2作品を漢訳したのは、日本に留学中のことだった。英語からの転訳である。そのひとつは漢訳題名を『匈奴奇士録』という。別作品は、『黄薔薇』だ。

本稿において、周作人訳『匈奴奇士録』の底本、すなわち英訳本を特定する。

不思議に思われる人もいるだろう。その英訳底本については、周作人がすでに自分で述べているのではないか。

結論の一部を先にいう。周作人が翻訳する際に使用した底本は、彼自身が証言しているものとは異なる。周作人の記憶違い、記述間違いだ。現在にいたるまでその事実を指摘した文章は、私が見た限りにおいて、ない。

古い例から引く。該当する漢訳作品についての言及が少ない。それを示すためだ。

阿英の記述から

阿英編『晚清小説史』(1937)*1の初版には「小国方面、有匈牙利 育珂摩爾 匈奴騎奇士録(周遠訳、一九〇八)」(281頁)とあるだけ。

周遠は周作人のこと。書名が間違っている。正しくは『匈奴奇士録』だ。この間違いを注記する研究者、編集者もいない。

阿英本人が誤記している。のちの版本(1955年、185頁)でも同文である。

書名を訂正する機会は、複数回あった。

阿英自身が『晚清小説史』を修正したとき(1955)、元娘婿の呉泰昌が校勘したとき(1980)、あるいは日本で翻訳された時(1978、1979)などだ。しかし、訂正はされなかった。念のため比較的最近に刊行された南京・鳳凰出版伝媒集団、江蘇文藝出版社版(2009)でも確かめる。驚いた。いまだに誤りを継承している。

阿英の原文が誤っている。その日本語訳も、書名を含めて同様に誤記する。

日本語訳『晚清小説史』

阿英著、飯塚朗、中野美代子訳『晚清小説史』(1979)*2である(279頁)。

該訳書は、詳細な注がほどこされており注目された。それらは、主として中島利郎の手になる*3。

阿英の該当する部分に、中島が注をつけている。これを見よう。

中島利郎訳注「晚清小説史試訳ノオト(2)」(『啞』第6号 1976.6.30)から先に引用する。つぎに飯塚、中野訳本の注をならべて示す。それぞれに見える59、54という数字は、注釈の番号だ。

[中島] 59 ヨーカイ・モール匈奴騎士録 Jókai Mór (育珂摩爾1825~1904ハンガリー)の“Egg az Isten”周作人訳光緒34年商務印書館刊。邦題『神は一なり』93頁

[飯塚中野] 54 『匈奴騎士録』Jókai

Mór (一八二五～一九〇四)のEgg az Isten (邦題は『神は一なり』)。周連とは周作人。光緒三十四年(一九〇八)商務印書館刊。374頁

両者は、誤字部分までほぼ同文であることがわかる。注釈者が同じだから当たり前だ。

『晩清小説史』にてでくる書籍についての日本語訳注は、阿英の「晩清小説目」を基本的に利用して書かれている。阿英を阿英によって注釈する。珍しい方法だと私は評した。実をいえば、当時はそれくらいしか利用できる資料がなかった。それだけのことにすぎない。

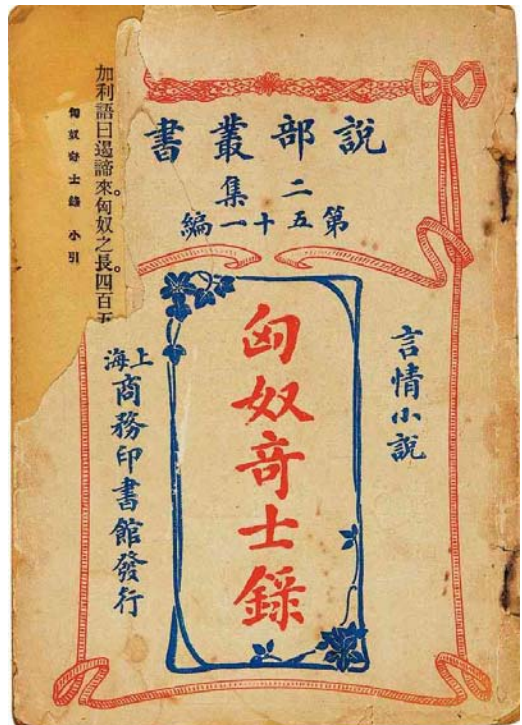
阿英は、彼が所蔵していた小説群を手元において論文を書いた。それをまとめたのが『晩清小説史』である。現在は、阿英のように実物を大量に所有する個人、あるいは公的図書館は、中国大陸にもたぶん存在しないだろう。私は聞いたことがない。今、清末民初に刊行された書籍を書影つきで紹介する専門書がいくつか刊行されている。貴重な資料だ。しかし、それらに収録された単行本は、阿英目録で検索しても一部にとどまる。ましてや、日本では最初から期待ができない。それが実状だ。昔も今も変わらない。

阿英「晩清小説目」

阿英「晩清小説目」(増補版1959)*4から該当部分を引用する。「119」はページ数を示す。

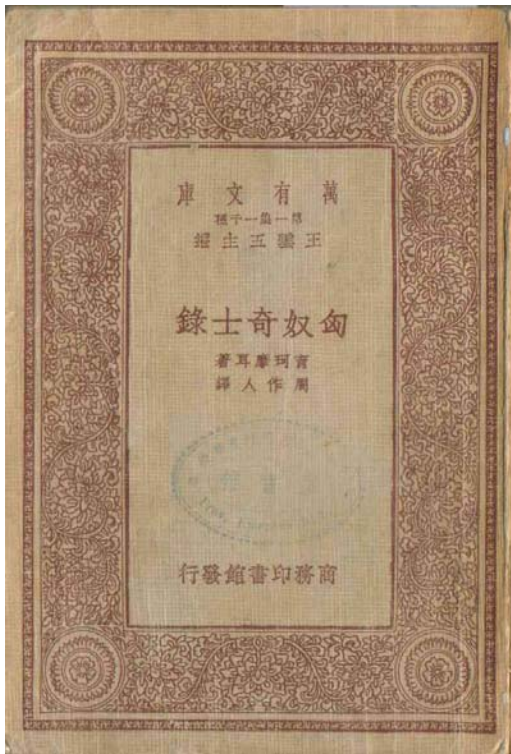
[阿英119] 匈奴^{ママ}騎士録 匈^{ママ}牙利 育珂^{ママ}摩爾著。周連(作人)訳。光緒三十四年(一九〇八)商務印書館刊。

周作人が出てきた。だが、角書、原作を記述しない。それが阿英の編集方針だ。のちの研究者のために仕事を残してくれた。中島利郎がハンガリー語原作名とその邦題を示したのは、一部を誤記しているとはいえ彼が努力して調査し



周作人訳『匈奴奇士録』「歐美名家小説」「説部叢書」 2点とも孔夫子旧书网から引用

た結果である。



「万有文庫」(架蔵)

頼みになるはずの阿英目録が、書名を間違う。阿英目録は、清末小説に関して研究界の権威である。研究者は、その記述を信じる。周作人翻訳の実物を見なかった中島が、訂正できないのもしかたがない。

周作人訳ヨーカイ・モール

あらためて、周作人による漢訳ヨーカイ・モールの題名などを示す。

(匈牙利) 育珂摩耳著、周遼(周作人) 訳
『(言情小説) 匈奴奇士録』商務印書館
光緒三十四年九月(1908)

その表紙写真を見れば、最初は商務印書館の「欧美名家小説」シリーズに収録された1冊だとわかる。

周作人が翻訳するさいに、底本としたのはなにか。これを明らかにするのが本稿の目的だ。

なにをいまさら、と感じる読者がほとんどだろう。くり返して申し訳ない。それが常識だからだ。周作人自身が該書の「小引」で明らかにしているではないか。

今ここに訳すのは、(18)77年作、原題は Egy az Isten! その意味は「神は唯一だ」。

今此所訳。為七十七年作。原名 Egy az Isten! 義云神一也*5。

いや、そうではない。原作ではなくて周作人が底本とした英訳本に問題があるというのだ。

彼が往事を回想して2度説明している。『匈奴奇士録』については、原作を含めて周作人の回想文の語句を、後の研究者はくり返し引用して終わる。それだけ。すなわち、専門家の全員が周作人の証言を検討することなく信用している。大丈夫なのだろうか。私は、不安を感じる。

なぜかといえば、周作人は、記憶違いをしたまま記述することがあるからだ。しかも、断言する。ためらう姿勢を表わさない。研究者はそれにだまされる。

彼は、アラビアン・ナイトのうちの1作品を漢訳した。そのとき使用した底本について、間違ったことを書いた。そういうことが事実としてあるのだ。私は調査のうえ、周作人の勘違いであることを証明した。それまでの専門家は、誰もその事実気づかなかった(後述)。すでに前例がある。『匈奴奇士録』に関しても確認しないわけにはいかない。

周作人が日本留学中に翻訳した作品を回想する文章が存在する。これから紹介しよう。当時の様子がわかる。

周作人『知堂回想録』

周作人は、『知堂回想録』上冊(1970)*6において、彼が日本留学中に漢訳した外国小説を一覧表にして5点をあげる。そのなかの1点が



『匈奴奇士録』だ。

三、匈奴奇士録、匈牙利育凱摩耳著、六万多字。207頁「七七翻譯小説(上)」

同じく「七八翻譯小説(下)」において比較的くわしくのべる。『匈奴奇士録』を英訳に基づいて漢訳した経緯を説明しているのだ。

その大要は、次のとおり。

兄魯迅と漢訳した『紅星佚史』が商務印書館に売れて200元の翻訳料を得た。周作人は、それにより丸善書店で英訳ツルゲーネフ選集15冊を購入したりする。次に翻訳したのはロシアの歴史小説だった。大トルストイ(注:ALEKSEI KONSTANTINOVICH TOLSTOIのこと)の「銀公爵」(注:白銀公爵 THE SILVER KING。(セレブリャヌイ公爵))を周作人が翻訳し、魯迅が修改して清書する。題名は『勁草』に改めた。書店に送ると手紙がきて、この作品はすでに翻訳されて刊行される、と。原稿は返却されてきた。しばらくするとその訳本が出た。上下2冊

で書名は『不測之威』(注:(俄)托爾斯泰著、商務印書館訳、商務印書館1908)である。翻訳原稿(注:『勁草』)は保管していたが、民国初年に魯迅が北京に持っていった。雑誌あるいは新聞社に送って発表しようと計画したが成功しなかった。ついには原稿も紛失してしまう。翻訳原稿が売れなかったので、新しく翻訳しなければならなかった。方針を変更し、他人との重訳を避けるためにめったに見ない材料を探すことにする。ハンガリーのヨーカイ(・モール。育凱)の殖民地版小説を書店で購入した。この人は革命家で有名な文人でもある。ハンガリーのスコットとも称され、歴史小説を得意とする。彼の英訳著作は、自分たちでも収集していた。翻訳して売るには、この種類のものが適切である。原書は長大だが、英訳者は省略している。私たちは翻訳して急いで目的を達成したかったので、それにかなっていた。その本は、一神教徒の物語であって書名を『神は唯一だ(神是一個)』という。三位一体を認めない。ただし、恋愛政治を挿入しておりとてもおもしろく書いている。そのため出版社(注:商務印書館)は「愛情小説」とつけた(注:実際の角書は「言情小説」)。この翻訳原稿はうまく売れたが、よこした金額が契約とは異なり1万字がところ少ない。半年後、本が印刷されたので特に1冊を購入しもらさず仔細に計算してみた。数えてみれば確かに正しくはなく、そこで手紙をやって追加請求する。その結果、大洋10数元数角数分をよこすことになった。その書店は1字でいくらと計算するからそのようにきっちりしていたのだ。翻訳は中越館において進めたが、序文には「戊申(注:1908年)五月」と書いているからすでに西片町に転居したあとだ。211-212頁

以上、要約おわり。

ヨーカイ・モールの作品を漢訳した経緯が、上の文章でわかる。

ただし、奇妙な箇所もないではない。ヨーカ

イ・モールの原作がなにかについての言及がない。ここでは、ハンガリー語原題を中国語で『神は一個』と示すだけだ。『神は唯一だ』と訳しておく。

周作人がよった英語版に『神は一個』を意味する語句があると考えられる。彼は、文言では量詞なしの『神一也』としていた。

説明する必要はないかとも思う。周作人が書いている一神教とは、ユニテリアン派 Unitarians のこと。辞書によると、父なる神、子なる神、精霊の三位一体説を否定し、キリストを神としない人たちの団体だとある。その教義を小説の題名にしたとわかる。

周作人は、日本の書店でヨーカイ・モールの英訳本を入手することができた。その機会に恵まれたのは、やはり日本東京に住んでいたからだろう。歴史的な背景があった。

徳永康元は、次のようにいう。

「ヨーカイの作品は翻訳を通じて欧米諸国で広く読まれたが、日本では千葉亀雄らの紹介があるだけで、邦訳はほとんどなかったようだ。しかし、第二次世界大戦後になっても、ヨーカイの主な作品の英訳本なら、神田の古本街で案内手に入りやすかったところを見ると、明治・大正期の日本人にはヨーカイの愛読者が相当いたのかも知れない」*7

周作人が底本に使用したのは、ヨーカイ・モールの英訳、それも簡約版だという。しかし、それ以上の説明が、ない。『神は唯一だ(神は一個)』は英訳題名ようだ。しかし、これだけでは原本を探すのはむづかしいだろう。

もっと以前、周作人は別の文章において、もう少し詳しく説明している。そちらも見よう。今から考えると、これが誤解のもとになった。専門家たちが、そろって惑わされたからだ。☹

【注】

1) 阿英編『晚清小説史』上海・商務印書館1937.5 / 修正版。北京・作家出版社1955.8 / 北京・人民文

学出版社1980.8。呉泰昌校勘(1991.4北京第二次印刷) / 北京・東方出版社1996.3民国學術經典文庫(人民文学出版社本にもとづき簡化字、横組み) / 南京・鳳凰出版傳媒集團、江蘇文藝出版社2009.1。台湾・商務印書館1968.5(表紙に「人人文庫679、680」とある。商務印書館1937年版を縮小影印。ただし、283頁途中から287頁まで周兄弟の翻訳小説部分を削除) / 改版1996.11台二版第一次、奥付に「新人人文庫127」 / 2004.4台二版第二次、奥付に「新人人文庫127」香港・太平書局1966.1(作家出版社1955年版を影印)。香港・中華書局香港分局1973.6(香港・太平書局1966年版を影印)。台湾・天宇出版社1988.9(香港・太平書局1966年版を影印)

- 2) 阿英著 飯塚朗、中野美代子訳『晚清小説史』日本・平凡社 東洋文庫349 1979.2.23
- 3) 書評を書いた。樽本「翻訳に訳者の姿勢が見える 阿英『晚清小説史』の翻訳を読む」『野草』第25号 1980.5.1、23-32頁。要約：阿英『晚清小説史』の翻訳3種についてそれぞれの特徴を述べる。
- 4) 阿英『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8 / 増補版 上海・古典文学出版社1957.9新一版、北京・中華書局1959.5。増補版を使用する
- 5) 後述の止庵編訂『周作人訳文全集』第11巻に収録する「小引」は、*Egy az Isten* と表記し「!」を省略している(211頁)。不正確だといわなければならない。阿英編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究巻』(北京・中華書局1960.3上海第一次印刷)にある「小引」も同様に間違う。周作人が「!」をつけているのには意味がある。英訳第14章において主人公マナセの兄が仲間と合い言葉のように交わす語句だ。英訳第26章でもマナセが仲間どうして発声している。周作人は漢訳せずに「!」をつけて原語をそのままにした。それを「小引」にも使用したわけだ。
- 6) 周作人『知堂回想録』上冊香港・聴涛出版社1970.7
- 7) バラージュ・ペーラ他著、徳永康元編訳『青ひげ公の城 ハンガリー短編集』恒文社1998.2.25。225-226頁

徐兆璋日記中的近代小說與出版史料 2

——以小說林社為中心

樂 偉平 選註

燕邸日記 光緒三十一年（1905）

八月初五日（9月3日），稍陰即霽。

閱《雙艷記》¹一卷。

九月初五日（10月3日），晴。

至海虞圖書館購新出小說數種。

九月望日（10月13日），陰，午後晴。

與徐念慈²函云：“都門旋里，匆匆不及造訪，甚以為歉。茲將蠻公一函先行郵寄，《催眠術》俟月底到滬面致。弟此行本為鄉間小學毫無紀律，亟思籌款改良。現與同事諸君粗定辦法，第一先習師範，以為教育基礎。已選得十人，皆可立時成行。尊處講習所能插入一班否？弟意如可插班，出月即可申送。為此專函，奉懇即日賜復。倘尊處無隙地可容，滬上尚有別處可以即日送入否？亦希示悉。昭邑鄉學萌芽在此一舉，足下熱心教育，諒必樂贊其成。”

1 《雙艷記》，英國佛露次斯著，小說林編輯員譯述，甲辰十月初版。

2 徐念慈（1875-1908），字彥士，別號覺我、東海覺我，江蘇常熟人。小說林社總編輯，《小說林》雜誌主編。他創作的《新法螺先生譚》是中國最早的科學幻想小說之一。此外，他還為小說林社譯有科學小說《黑行星》、冒險小說《海外天》、言情小說《美人妝》、軍事小說《新舞台》等多種作品。

十月二十九日（11月26日），陰

與唐蔚之³書云：“唐海平遊學津貼，刻同（因）師範生聞君因病歸婁，缺懸未補，而海平已於廿三日東渡。可否函致蔣伯言兄，將聞君之款津貼唐君，俾不至因乏費而輟學，感甚。”

十一月二十四日（12月20日），陰。

午後，晤徐念慈，在虹口師範講習所，復于小說林得映南⁴一函。

十一月二十六日（12月22日），陰。

午後，偕徐念慈至教育器械館購學堂應用諸物。

十二月朔日（12月26日），陰。

予鄉本擬送師範十餘人，定費五百元。及至上海探聽，龍門取費每年不過四十元，然極難考。商務印書館所設師範學院講習所，今年以半年卒業，明年改為一年卒業，取費近八十元。……甚矣師範之不易送也！

十二月望日（1906年1月9日），陰，微霽。

與唐海平書云：“……小說林中亟於覓稿，足下有暇，能譯一興起國民精神之小說否？偵探、艷情二種太夥，難於出奇制勝也。京寓多暇，足下有稿可代為潤辭。近並思編一譯本小說提要，分別門類，各加評語。茲事宏大，且無助我者，恐未必旦夕能成。”

3 唐文治（1865-1954），字穎侯，號蔚芝，晚號茹經，江蘇太倉人，1892年進士，1895年進江陰南菁書院，受業於經學大師黃以周和王先謙，從事訓詁之學。1907年，接任上海南洋公學（當時改名“郵傳部高等實業學堂”）監督，後在無錫創辦無錫國學專修學校。著作有《茹經堂文集》、《十三經提綱》、《國文經緯貫通大義》、《茹經先生自訂年譜》等。

4 張鴻（1867-1941），初名澄，字映南，一字陽南，別署瑤隱，瓊隱，晚號蠻公，燕谷老人，江蘇常熟人。1902年，與徐鳳書等人創辦東亞譯學會，並為該會出版的《政學報》任主編。1907年進士，曾任日本長崎領事、神戶領事、朝鮮仁川領事等。1916年回鄉，從此致力於家鄉事務。著有《蠻巢詩詞稿》、《遊仙詩》等，譯有《成吉思汗實錄》，還受曾朴的委託續寫了《孽海花》。

十二月二十一日(1906年1月15日),晴。

與丁芝孫書云:“……小說林中要“劄記”一門否?近日擬就神仙鬼怪四事分條証書,力破迷信,新年可脫稿。又《黃車掌錄》⁵一書,考證舊小說而附以譯本小說提要,正二月間亦可脫稿。如尊處能代印,當郵稿就正。”

燕台日記 光緒三十二年(1906)

正月初五日(1月29日),陰。

唐海平臘月廿三日函云:“……傑現譯《噫無情》一書,乃法國文豪囂俄所著,日本黑岩淚香譯者。出版未及一月即行售罄,可知其書之價值矣。又偵探小說名《人外境》者,亦淚香所譯,共三冊。未知小說林及時報館有無翻譯?乞為探聽,將來亦擬譯之也。傑現既津貼不可得,只得且做苦學生,藉譯資以充學費。唯筆墨甚拙,將來脫稿時望姑丈為我潤色,並懇先向小說林介紹,則感德無盡矣。”

與唐海平書云:“……《噫無情》一書是否即前刊入《國民日日報》之《慘社會》,單刊本改作《慘世界》,亦是囂俄所著,望一調查,免復譯也。近日譯家往往改易面目,非將原書情節略述一二,無從考訂異同也。《人外境》未見,小說林所譯有《秘密海島》三冊,《新小說》中《海底旅行》之奇人李夢即歸宿於此書,未知即《人外境》否?但《秘密海島》是冒險而非偵探,竊疑其非一書也。潤詞一事當力為擔任,近見林琴南所著細膩熨貼,別開勝境,每為神往,輒思效顰。足下能譯稿見寄,則可破我岑寂矣。小說林需材孔亟,當為介紹。”

二月十三日(3月7日),晴。

與丁芝孫函云:“……競化女學堂⁶經濟缺乏,弟當捐助丙午年經費洋二十元,聊盡綿力耳。

袁項城⁷有設女官之議,亦分九品,給文憑,賜徽章。此舉若行,女權可望發達。都城有女學校數處,開校之日,亦有達官家眷前往觀禮者,足見風氣之逐漸開通矣。”

唐海平正月二十日函云:“……傑現在正則預備英文、理化,功課頗忙,除禮拜日外幾無暇。小說《噫無情》僅譯成數千言,俟有萬言即呈上。”

二月十四日(3月8日),乍晴乍陰。

與唐信甫書云:“海平津貼事已托蔚芝侍郎設法,想靠得住,當再往催之。海平亦常通信,近日譯一小說,欲寄稿與弟潤色,售諸小說林中。倘月得萬言,每年亦可獲洋二百之數。故弟以為學費一節不必慮。”

二月三十日(3月24日),晴。

孫希孟二十日函云:“……摩師⁸合股辦說部叢報,頗欲得大著,藉光簡帙。特囑走筆致意,未審得允許否?”

三月初四日(3月28日),陰。

與孫希孟書云:“摩西叢報條例若何?能集成公司否?弟此書尚未寫定,摩西事若成,盡可付彼,候來示定奪。”

三月十一日(4月4日),晴。

雙南⁹已受東吳大學堂聘為國文正教習,每

7 袁世凱(1859-1916),字慰亭,號容庵,漢族,中國河南項城人,中國近代史上著名政治家、軍事家。

8 黃人(1866-1913),原名振元,字慕庵(一作慕韓),中年改名黃人,字摩西,江蘇昭文縣(今常熟)人,中國近代文學史上重要的文學家、學者,南社早期社員、東吳大學(現蘇州大學)首任國文總教習,小說林社的核心成員。黃人的著作甚多,其詩詞集存留於世的有《石陶梨煙室詩存》、《非想非非想天中人語》、《摩西詞》等。其文在生前並未結集。關於黃人作品,目前收集最為完備的是江慶柏、曹培根整理的《黃人集》,上海文化出版社2001年版。

9 張繼良(1871-?),江蘇常熟人。字南陔,又字南穉,號蘭思、雙南、敷生。1895年進士,任刑部主事,山西河津縣知事。入民國,任江蘇省公署秘書,河南督理軍務署顧問。

5 《黃車掌錄》,徐兆璋稿本,現存常熟市圖書館。

6 1904年秋,徐念慈、丁祖蔭、朱積熙等人創辦競化女學校,這是常熟最早的女學堂。

年四百日，一月可告假一禮拜，系摩西介紹，于昨日赴蘇開校矣。

三月十二日(4月5日)，晴。

唐海平陽曆三月廿六日三月二日函云：“小說《噫無情》全書共約十餘萬言，欲以課餘之暇譯之，竣事殊匪易易。僕初意以為無論如何，一邊求學，一邊譯書，總可使得；到今日方知此事之難。蓋一日之中，學堂功課去其七時，自修時間至少四五時，一天到晚弄得頭昏腦脹，實無腦力可再用於譯書之上。再三思之，當此日在經濟恐慌之中，于求學之外，復及生財之法，固為萬萬不可得之事。而一年之留學費至少需四百元，照此情形，將來豈堪設想？現唯有二路可走，如二路不行，則作歸計而已。其一即請貸公費……其二即譯書印行。蓋來東留學者日見其夥，凡有關係于日本文語諸書無不風行。上月在書鋪購得《日本俚諺集》，一切俚諺俗語無不備載，洵學東文者必讀之書也。唯諺語翻譯極難，雖在日人，非優於文學者亦不盡解。僕決定趁此休假，譯成是書，自行出版。將來上海小說林、京中各書店皆須寄售，費神先為介紹。刊資一時難於籌措，可否代借百元，少至六七十元亦可。書售出後，當即歸楚。萬一書滯不銷，定即另想他法，及早料理也。”

閏四月初七日(5月28日)，晴

張雙南廿九日函云：“《雁來紅》第一期今日另封郵寄，望並查收。”

閏四月十一日(6月2日)，乍陰乍晴。

與張雙南書云：“……摩西以叢書為叢報，甚善。惟校對未精，且書之與報銷售大有差等：此種若印成單本，亦可暢銷；一名為報，讀者有未完之憾，而經售者存拖欠之心。何不仿叢書體例，以十種為一集，可分可合。既便流通孤本，且能周轉母金。此中利害，不可不明辨析也。”¹⁰

10 黃人確實聽從了徐兆璋的建議，《雁來紅叢報》第六期後登有廣告《〈雁來紅叢報〉書目略》，分“甲種學術類”、“乙種稗史類”、“丙種傳奇雜劇類”、“丙種叢錄”、“附錄新編小說”，下面各列有若干種單行本

閏四月十三日(6月4日)，晴。

孫希孟初一日函云：“聞得《雁來紅》已由雙南緘奉矣。明史一獄，首期即從《南潯志》錄登，景賢尚嫌其拾獮官書，別無新得。而小說林因此恐違礙獲咎，不肯代為發行。孟朴¹¹達人，亦復爾爾，可異也。”¹²

閏四月二十日(6月11日)，晴燥，甚熱；夜，風甚大。

閱吳步雲譯《一封書》¹³二卷。《雙指印》一卷。

閏四月二十一日(6月12日)，晴，熱。

閱《美人妝》¹⁴一冊，《恩仇血》¹⁵一冊，《大復仇》¹⁶一冊。

書籍。已在《雁來紅叢報》連載的《妖怪學講義》、《虞山妖亂志》、《色情狂病理》、《大獄記》、《浮生六記》、《陶庵夢憶》等書，都列在書目中。另有若干種新書，到停刊時，也未及在叢報上登載。

11 曾樸(1872-1935)，字孟樸，又字小木、籀齋，號銘珊，別號東亞病夫、病夫國之病夫。江蘇常熟人。1904年與丁芝孫、朱積熙等人創辦小說林社。著述甚富，接續金松岑而著的《孽海花》是其代表作。三十年代于上海開設真美善書店，出版《真美善》雜誌及多種單行本小說。

12 《雁來紅叢報》所標的出版信息是“總發行所：蘇州觀東股元順刻字店。代派處：上海鴻文書局，上海棋盤街小說林社，常熟大步道巷金第，上海各書坊”。可見，曾樸雖然不願代為發行《雁來紅叢報》，但仍肯在小說林社代售。

13 《一封書》，英國麥孟德原著，洞庭吳步雲譯述。上卷甲辰十一月初版，下卷乙巳二月初版。

14 《美人妝》，最初為《女子世界》增刊，後版權贈予小說林社。筆者見到的《女子世界》增刊本，所標的出版資訊為：昭文東海覺我講演，甲辰十月初版，發行兼編譯者：女子世界社，總發行所：小說林。筆者見到的小說林社本，為丙午二月三版。

15 《恩仇血》，甲辰七月初版，震澤陳彥譯意，吳江金一潤詞。據樽本照雄《清末民初小說目錄》(第5版)E0178*條，該書的底本是：Arthur Conan Doyle, *A Study In Scarlet*, 1887.12.

16 《大復仇》，甲辰六月初版，元和奚若譯意，昭文

閏四月二十二日(6月13日),晴,熱。

閱《新舞臺》¹⁷二編一卷,《軍役奇談》¹⁸一卷,《奇獄》¹⁹一卷,《雙艷記》一卷。

閏四月二十三日(6月14日),陰,稍涼。

閱《福爾摩斯再生後探案》²⁰十卷。予欲為譯本小説書提要久矣,然不閱東西文原本,斷不能知其優劣異同。今將所閱之各書先為編目,分別門目,其重複者一一注明,以俟異日通東西文後再加考索。有原序原跋一一錄存,仿各家藏書目錄例也。

閏四月二十四日(6月15日),乍陰乍晴,午後晴又熱。

黃人潤辭。據樽本照雄《清末民初小説目錄》(第5版)D0071*條,該書的底本是 Arthur Conan Doyle, *A Study in Scarlet*, 1887.12。

17 《新舞臺》,日本押川春浪著,昭文東海覺我譯述,一編甲辰六月初版,二編乙巳五月初版,三編連載于《小説林》雜誌第二期至第九期,第十一至十二期,1907-1908年。據樽本照雄《清末民初小説目錄》(第5版)X1881*條,一編底本為押川春浪《武俠の日本》,日本:博文館、東京堂1902.12,據X1882*條,二編底本為押川春浪《新造軍艦》,文武堂1904.1。據X1886*條,三編底本為押川春浪《武俠艦隊》,文武堂1904.9。

18 《軍役奇談》,英脫馬斯加泰著,陶淵旦譯述,甲辰七月初版。

19 《奇獄》(一),美國麥枯滑特爾原著,丹徒林蓋天譯述,甲辰十一月初版。據樽本照雄《清末民初小説目錄》(第5版)Q0269*條,該書的原作是 George Mcwatters, *Detectives of Europe and America*。日本千原伊之吉譯《奇獄》,日本同盟法学会1888.11。

20 封面和版權頁作《福爾摩斯再生第一案》,而正文第一頁作“福爾摩斯再生後探案之第一案”。《福爾摩斯再生第一案》,上海周桂笙譯,甲辰十二月初版。《福爾摩斯再生第二、三案》,《福爾摩斯再生第四、五案》,元和奚若譯,武進蔣維喬潤辭,甲辰十二月初版。《福爾摩斯再生案六至十》,丙午年正月再版。六至八,奚若譯述,蔣維喬潤詞。九至十,周桂笙譯述。《福爾摩斯再生案十一二三案》,周桂笙譯述,丙午十月初版。

閱《無名之英雄》²¹三卷。

閏四月二十七日(6月18日),晴。

寄翥叔書云:“……近編譯本小説目錄,統計將近百種,惟中多重復:如海平所譯之《小公子》,華美書局有譯本名《小英雄》,于光緒二十九年出版,是複製矣。此次回至滬上,擬詳細搜羅,編一提要,既便讀者,亦免重譯。近時往往不著譯本所自出,遂有疑其杜撰者,如徐念慈之《美人妝》類,令人無從考索,最為譯界蠹賊。日本小説必多佳制,近時所譯未必皆彼中上駟。如能聯成譯社,輸入支那,吾知刷印家必歡迎恐後也。”

閏四月二十九日(6月20日),陰,微雨稍涼。

閱《小英雄》二卷,《小公子》二卷,此一書而復譯者。以文筆言,則《小公子》高出幾許矣。

五月初十日(7月1日),晴,熱。

(閱)《彼得警長》²²三卷。

五月十一日(7月2日),陰涼,午後雨。

閱《女魔力》²³三卷,《黃金血》一卷。

五月十二日(7月3日),晴,午後大雷雨,更許止。

閱《車中毒針》一卷,《情海劫》²⁴一卷,《泰西說苑》一卷,《小仙源》一卷。 罍

21 《無名之英雄》,法國迦爾威尼原著,吳門天笑生譯述。上卷甲辰八月初版,中卷乙巳三月初版,下卷乙巳六月初版。據樽本照雄《清末民初小説目錄》(第5版)W0982*條,該書的原作是 Jules Verne, *Famille-Sans-Nom*, 1889。包天笑由日譯本(森田思軒《無名氏》,春陽堂1898.9.11)轉譯。

22 《彼得警長》,洞庭吳步雲譯。上、中卷,丙午正月初版,下卷丙午四月初版。

23 《女魔力》,英國奇孟著,洞庭吳步雲譯。上卷乙巳五月初版,中卷乙巳六月初版,下卷丙午二月初版。

24 《情海劫》,吳江任墨緣譯述,武進李叔成潤詞。上卷丙午三月初版,下卷丙午八月初版。

早期漢訳ドーデ「最後の授業」2

胡適訳「最後一課」のばあい

神田 一三

フランツが見て取ったのは、先生が着ている特別な衣裳だった。

je remarquai que notre maître avait sa belle redingote verte, son jabot plissé fin et la calotte de soie noire brodée qu'il ne mettait que les jours d'inspection ou de distribution de prix. p.13

私は先生が、督学官の来る日が賞品授与式の日でなければ着ない、立派な、緑色のフロックコートを着て、細かくひだの付いた幅広のネクタイをつけ、刺しゅうをした黒い絹の縁なし帽をかぶっているのに気がついた。12頁

私が注目するのは、アメル先生が身につけた衣裳だ。フロックコートに絹の縁なし帽子という外見。具体的な画像はないかと探した。ウェブ上でそれらしいものを見つけたので1枚選んで掲げる。

この絵では、チョッキをつけて襟元は蝶ネクタイ、あるいはリボンのような飾りが見える。縁なし帽子 calotte は、ベルギーのカソリック大学でかぶるものだとももの本にはある。アメル先生の経歴を暗示するのか。そこまではわか



アメル先生



縁なし帽子 calotte

らない。帽子を新聞の題名にした画像がある。参考までに掲げる。僧侶の帽子だ。

細かなヒダのついた胸飾り jabot plissé fin に焦点を合わせる。

桜田訳では「細かくひだの付いた幅広のネクタイ」とある。ネクタイも確かに胸飾りのひとつに違いない。辞書には、シャツの胸飾り、などと説明があるとおりだ。



胸飾り ウェブから引用

細かいことを書いていると読者は思われるだろう。小さいところに手がかりがある。そう私は考えるのだ。

英語の重訳を見る。

【マッキンタイア】I noticed that our master had donned his beautiful green frock-coat, his finest frilled shirt, and his embroidered black silk calotte, which he wore only on inspection days, or upon those occasions when prizes were distributed. p.3

緑色のフロックコートに刺繍付き黒の絹の縁なし帽子はよろしい。気になるのは、フランス語原文では胸飾りとなっている箇所だ。英訳では「すばらしいひだ飾りのついたワイシャツ shirt」と翻訳している。厳密に言えば、単体で使用する胸飾りと、ひだ飾りのついたシャツとは違う。だが、見た目は同じだ。英訳のワイシャツ shirt に注目したい。



ひだ飾りのついたワイシャツ ウェブから引用

もうひとつの英語重訳も引用する。

【レイノルズ】did I see that our teacher had on his beautiful green coat, his frilled shirt, and the little black silk cap, all embroidered, that he never wore except on inspection and prize days. p.338

まったく同文というわけにはいかない。別人が英訳している。微妙に異なる。

緑色のコートと小さな黒い絹帽子だ。刺繍付きという形容詞が前の全部にかかっているように読める。注目するワイシャツはどうか。「彼のひだ飾り付きワイシャツ」だから shirt 部分は共通する。

胡適は、その部分をどう漢訳したか。

【胡適】纔看出先生今天穿了一件很好看的暗緑袍子，挺硬的襯衫，小小的絲帽。這種衣服，除了行礼給獎的日子，他從不輕易穿起的。3頁

先生が今日きれいな暗緑色の上着と、とても上等なワイシャツに小さな絹の帽子を着ていることによやく気がついた。この手の服は、儀式授賞の日を除いては、いままでなかなか着たことがない。

全体から見れば、それほどの違いはないか。本当か。いままで誰も気づかなかったようだ。指摘した人はいない。

ちいさな箇所が異なる。「暗緑」は green からすこしズレる。上着と訳しておいたが、胡適の漢訳した「袍子」は中国式の長衣だ。フロックコートが中国には存在しないならば、ここは林訳式に中国にある上着で代用せざるをえない。だが、別の単語を使うか、また説明する方法もあったのではないか。現代の劉方は「礼服」と訳した。胡適は別のところでアメル先生の服装全体を指して「礼服」と漢語を当てた。それを流用してもよかった箇所だろう。

興味深いのは、胡適が「襯衫」と漢訳していることだ。マッキンタイア英訳あるいはレイノルズ英訳の shirt (ワイシャツ) にもとづいたとわかる。胡適漢訳の底本が英語重訳である証拠のひとつだ(証拠3)。

「小小的絲帽」から見ると、レイノルズ英訳

the little black silk cap に近いか(証拠4)。しかし、これだけでは証拠とするにはやや不足する。断定はしない。もうすこし見てみよう。

別の英訳本も参照した。アイヴス英訳だ。こちらは、plaited ruff(ひだ襟)と訳してある。ハーヴァード Harvard 英訳も同様であることは、以後いわない。



ひだ襟 ウェブから引用

胡適がワイシャツと漢訳したのは、

マッキンタイア英訳、あるいはレイノルズ英訳によったと判断してよい。もうひとつ、フロックコートの色が違う。アイヴス英訳では、青色 handsome blue coat だ。これもアイヴス英訳ではない根拠になる(証拠5)。

英語重訳である可能性が高い。しかもマッキンタイア英訳あるいはレイノルズ英訳であって、アイヴス英訳ではない。そうとわかる決定的な箇所が出てきた。

フランス語原文の「刺しゅうをした黒い絹の縁なし帽」だ。マッキンタイア英訳は、his embroidered black silk calotte と原文の calotte をそのまま利用している。レイノルズ英訳は、前出のとおり the little black silk cap だ。確かめておくが、縁なし帽子である。

ところが、アイヴス英訳は、「刺繍をした黒い絹のズボン the black silk embroidered breeches」にしてしまった。帽子とズボンは違う(証拠6)。

胡適は、またワイシャツと帽子をならべて細かい飾りをすべて取り去る。刺繍もない。そうするのは、「挺硬の襯衫, 小的絲帽」と漢字5文字で対にしたいからだ。中国人の好みにあわせた。原文に忠実な漢訳にはなっていない。

教室には、普段は見なれない村の人々が参加している。オゼール老人がいる。

フランス語原文では、le vieux Hauser だ。マ

ッキンタイア英訳、レイノルズ英訳では old Hauser(ハウザー。ドイツ語でも同じ)とする。それに胡適は「赫^マ那老頭子(4頁)をあてた。英語読みだ。しかも誤植だろう。それにしては、1931年6月第十五版でも直ってはいない。現在の版本では「赫^マ那」と訂正してある。どのみち英語のハウザーにしか読めない。ここも、アメル先生を漢麦(ハメル)先生にしたのと同類だ。胡適が本当にフランス語を理解していたのかどうか、あやしい。

オゼール老人が持ってきている三角帽子(tricorne / 英訳 three-cornered hat)を胡適は省略する。

同じく持参している縁のいたんだ古いアルファベット練習帳(un vieil abécédaire mangé aux bords)をマッキンタイア英訳は an old primer, chewed at the edges にした。レイノルズ英訳もほぼ同じ an old primer, thumbd at the edges. 古い入門書だ。英訳に見る入門書よりもアルファベット練習帳のほうがより初歩的段階だと思われる。その「縁のいたんだ」を省略して、胡適は「一本初級文法書」に漢訳している。マッキンタイア英訳、レイノルズ英訳に基づいたとわかる(証拠7)。別の英訳は、an old spelling-book with gnawed edges とする。

よく似ているマッキンタイア英訳とレイノルズ英訳だ。しかし、こまかく異なる箇所がある。普段は見なれない町の人々の中に元村長たちがいる。

l'ancien maire, l'ancien facteur p.13

元の村長、元の郵便配達夫 13頁

【マッキンタイア】the venerable mayor, the aged carrier p.3

尊敬すべき村長、老いた郵便配達人

【レイノルズ】the former mayor, the former postmaster p.338

前の村長、前の郵便局長

【胡適】這邊是前任的県官, 和郵政局長

4頁

こちらには前任の村長と郵便局長

レイノルズ英訳だけが、郵便局長にしている。また、胡適漢訳も同じだ。ということは、ここにあげた2種類の英語重訳の、どちらからかというレイノルズ英訳が胡適漢訳の底本である(証拠8)。もう少し確かな箇所はないかとさがす。

つぎは、胡適が加筆して書き換える部分だ。

Mes enfants, c'est la dernière fois que je vous fais la classe. L'ordre est venu de Berlin de ne plus enseigner que l'allemand dans les écoles de l'Alsace et de la Lorraine
..... pp.13-14

みなさん、私が授業をするのはこれが最後です。アルザスとロレーヌの学校では、ドイツ語しか教えてはいけないという命令が、ベルリンからきました..... 13頁

【マッキンタイア】My children, this is the last day I shall teach you. The order has come from Berlin that henceforth in the schools of Alsace and Lorraine all instruction shall be given in the German tongue only. p.3

【レイノルズ】My children, this is the last lesson I shall give you. The order has come from Berlin to teach only German in the schools of Alsace and Lorraine. p.338

英訳はふたつともほぼ原文と同じ。

アメル先生が行なうフランス語の最後の授業だ。ここを読んで、中国の一般読者はただちにアルザスとロレーヌがドイツに割譲されたと理解するだろうか。フランス人は別にしてもだ。胡適は、漢訳の前言で少し説明している(後述)。普通の中国人は、ドーデがフランス人作

家であることさえ知らないだろう。私がいうのではない。胡適がたぶんそう考えて配慮した。この箇所について、中国人に原文に忠実な漢訳を示しても理解しないはず。下に示す漢訳を見れば、そう考えたにちがいない(下線は筆者)。

【胡適】我的孩子們，這是我最末了的一課書了。昨天柏林(普国京城)有令下来說，阿色司和娜恋兩省現在既已割歸普国，從此以後，這兩省的学堂只可教授德国文字，不許再教法文了。4頁

みなさん、これが私の最後の授業です。昨日、ベルリン(プロシアの首都)から命令がきて、アルザスとロレーヌの両省は現在すでにプロシアに割譲されており、今後この地方の学校ではドイツ語のみを教えることができますだけです。フランス語を教えることは許されなくなりました。

下線部が胡適の加筆した箇所だ。

フランスとプロシアの戦争がいくども起こった。両国の国境に位置するアルザスとロレーヌは、戦争のたびにフランス領となりプロシア領に変更されることがくり返された。そういう歴史背景をもった地方だ。領地割譲だから、胡適は漢訳名を「割地」に変更した。彼の興味がどこあたりにあるのかわかる。

アルザス人のフランツ少年は、フランス人教師のアメル先生からそう告げられた。アメル先生にとっては最後の授業だから特別な衣服を着ているのだと理解できる。

胡適は、もとが短篇小説である英語重訳をさらに省略して漢訳している。ところが、この部分のみ説明を加えた。ベルリン、プロシアへ割譲、フランス語禁止だ。

特にフランス語禁止に注目する。

すでにドイツ語のみを教える、と説明している。重ねてフランス語禁止というのは同じ内容を別のいい方で表現しただけだ。重複している。

胡適が強調したかったのはこうだ。戦争がもたらした政治の変化で一般の人々は使用言語まで強制的に変更させられる。別のいいかたをすれば、「母語が奪われる」この母語がフランス語だから、「祖国愛(愛国心と同じ)」と一直線につながる。彼は、作者ドーデの創作意図をそう理解した。

最後の授業。フランツ少年はこれを聞いて大いに驚く。

Ces quelques paroles me bouleversèrent. Ah ! les misérables, voilà ce qu'ils avaient affiché a la mairie. p.14

この言葉は私の気を転倒させた。ああ、ひどい人たちだ。役場に掲示してあったのはこれだったのだ。13頁

【マッキンタイア】省略

【レイノルズ】What a thunder-clap these words were to me! Oh, the wretches; that was what they had put up at the town-hall! p.338

その言葉は、私にとってなんとという雷鳴(青天の霹靂)だったことか! ああ、ひどい人たちだ。役場に掲示してあったのは、これだったのだ。

【胡適】我聽了這幾句話，就像受了雷打一般。我這時纔明白，剛纔市政廳牆上的告示原來是這麼一回事。4-5頁

私はその言葉を聞いてまるで雷に打たれたようだった。この時、私はようやく理解した。さきほど役場の壁に掲示してあったのは、このことだったのだ。

「気持ちを動転させる」というフランス語原文は、マッキンタイア英訳では省略された。なにもない部分を胡適が想像力で補い「就像受了雷打一般」と漢訳したとは考えにくい。胡適の漢訳は、「雷」でレイノルズ英訳 thunder とつながっている。胡適の底本になっているのは、

レイノルズ英訳だと判断してよい(証拠9)。

フランツ少年は、今後フランス語を学ぶことができないと聞かされて過去の自分の不勉強を反省する。胡適は原文にはない「この23年(這兩年)」を小さく加筆する。

「ザール川で氷滑りして “à faire des glissades sur la Saar! / 英訳making slides upon the Saar! / going sliding on the Saar!”」学校を怠けた。ザール川は中国人読者には不必要だと考えたか。胡適は削除して、「クリケットをする(打木球)」に書き換えた。「木球」は「板球」だと辞書にはある。氷滑りを、なぜより理解がむづかしいクリケットにするのだろうか。単なる木の球遊びと考えるほうが自然かもしれない。

いままであんなに嫌っていた「文法書や聖書など “ma grammaire, mon histoire sainte / 英訳my grammar, my Bible-history / my grammar, and my history of the saints”」が、胡適漢訳では「文法書歴史書」だ。

文法書は、英語訳2種は共通する。後者のフランス語原文は「聖書に書かれた歴史」だ。マッキンタイア英文は「聖書物語」に、レイノルズ英文は「聖者の歴史」にした。胡適漢訳の単なる「歴史書」では宗教が抜けてしまった。なぜ「聖書(聖經)」にはしなかったのか。

多くの村人が教室に参加している理由は、次のとおり。

C'était aussi comme une façon de remercier notre maître de ses quarante ans de bons services, et de rendre leurs devoirs à la patrie qui s'en allait..... p.15

また、それは先生に対して、四十年間よく尽くしてくれたことを感謝し、去り行く祖国に対して敬意を表するためでもあった..... 14頁

【マッキンタイア】it was their way of telling our master they thanked him for his forty years of faithful service, and desired to

pay their respects to the land whose empire was departing. p.4

【レイノルズ】It was their way of thanking our master for his forty years of faithful service and of showing their respect for the country that was theirs no more. p.339

英訳2種は、フランス語原文の直訳になっている。では、ここを胡適はどう漢訳したか。原文にない「23年」をつけ加えたくらいだ。40年はどう訳したか興味のあるところだ。

【胡適】咳、可憐的很！…… 5頁

ああ、あまりにもかわいそうだ！……

これには驚く。アメル先生の40年間にわたるフランス語教師としての尽力は、どこにもない。胡適は、省略してしまった。これでは、アメル先生の姿に失われる「祖国」を重ね合わせて書いているドーデの意図を無視したことになる。胡適の直訳主義はどこにいったのか、と問いたい。

フランツが先生の質問に間違えずに暗唱することができたならば、なんでもしただろう、と空想する箇所がつづく。胡適は、ここも削除した。

フランツは、暗唱に失敗する。立ったまま、顔もあげられず、腰掛けの間で身体をゆさぶっていた。

問題は、フランツが身体をゆさぶっていた、である。マッキンタイア英訳は直訳して swinging from side to side そのままだ。ところが、レイノルズ英訳は、それとは違う。holding on to my desk (私の机をしっかりとつかんで)とする。

とても細かいことを私は説明している。くりかえすが、細部に問題解決の手がかりがある。このばあいは、胡適が漢訳するにさいし使用した底本を特定するための判断材料になる。

身体をゆさぶるのか、机をつかむのか。胡適

は、どう翻訳しているのか。

胡適漢訳の「両手撑住桌子」(5頁)とは、両手で机を支える、である。レイノルズ英訳のほうだ(証拠10)。

アメル先生がなぐさめ顔でいう。

Ah ! ç'a été le grand malheur de notre Alsace de toujours remettre son instruction à demain. p.15

ああ！いつも勉強を翌日に延ばすのがアルザスの大きな不幸でした。14頁

【マッキンタイア】Ah, it has ever been the greatest misfortune of our Alsace that she was willing to put off learning till tomorrow ! p.5

【レイノルズ】Ah, that's the great trouble with Alsace; she puts off learning till tomorrow. p.339

【胡適】省略

アメル先生のアルザス人に対する感想部分だ。ここを胡適が省略したことを記録しておく。

アメル先生は、あの人々(ドイツ人という単語を口にしたくなかった)が言いそうなことをのべる。

Maintenant ces gens-là sont en droit de nous dire : Comment ! Vous prétendiez être Français, et vous ne savez ni parler ni écrire votre langue !... p.15

今あのドイツ人たちにこう言われても仕方ありません。どうしたんだ、君たちはフランス人だと言いはっていた。それなのに自分の言葉を話すことも書くこともできないのか！……14頁

【マッキンタイア】And now these foreigners can say to us, and justly, ' What! you profess to be Frenchmen, and can neither speak nor write your own language? ' p.5

【レイノルズ】 Now those fellows out there will have the right to say to you: ' How is it; you pretend to be Frenchmen, and yet you can neither speak nor write your own language? ' p.339

フランツ少年たちアルザス人が置かれている言語環境を説明する箇所だ。フランス人だと主張しているが、母語であるフランス語は話すことも書くこともできない。ならば、フランツたちは、日常には何語を話しているのか。疑問が出てくる。だが、そこをドーデは書かない。わざと説明しないのである。

また、アメル先生の言葉からわかることは、フランツたちがフランス人になっていることだ。そうドーデは設定し描写している。有無をいわせない。事実を明らかにすれば、この作品それ自体が崩壊するからだ(後述)。

アメル先生のことばを、胡適はどう漢訳したか。

【胡適】 你們自己想想看，你總算是一個法國人，連法國的言語文字都不知道。6頁

君たち自分で考えてごらん。フランス人のつもりだが、フランス語をしゃべることも文字さえも知らない。

「あの人々(ドイツ人)」を漢訳しなかった。すると、上の台詞はアメル先生が発言したことになる。ドイツ人がいうならば、外国人だからまだ許せるかもしれない。だが、おなじ内容を、フランス人が直接話す。そうすると、フランス人のはずのフランツ少年たちにとっては、同国人による批判なのだから強烈さの度合いが増す。

アメル先生のことばが続く。フランツたちの両親を批判する。その部分だけを抜き出す。胡適は、該当部分を漢訳していない。

Vos parents n'ont pas assez tenu à vous

voir instruits. Ils aimaient mieux vous envoyer travailler à la terre ou aux filatures pour avoir quelques sous de plus. p.16

君たちの両親は、君たちが教育を受けることをあまり望まなかった。わずかの金でもよけい得るように、畑や紡績工場に働きに出すほうを望んだ。15頁

【マッキンタイア】 Your parents have not shown enough anxiety about having you educated. They preferred to see you spinning, or tilling the soil, since that brought them in a few more sous. p.5

【レイノルズ】 Your parents were not anxious enough to have you learn. They preferred to put you to work on a farm or at the mills, so as to have a little more money. p.339

胡適が削除した理由はわからない。多くある省略のなかのひとつだ。

次は、よく知られた語句だろう。

quand un peuple tombe esclave, tant qu'il tient bien sa langue, c'est comme s'il tenait la clef de sa prison p.16 注あり。F. MISTRAL. 《 S'il tient sa langue, - il tient la clé qui de ses chaînes le délivre. 》

ある民族がどれいとなっても、その国語を保っているかぎりは、そのろう獄のかぎを握っているようなもの(後略)。桜田は原文につけられた注を翻訳していない。別の版では訳しているのかもしれないが未確認)15頁 注の訳。自分の国語を持っていれば、鎖から解き放つ鍵を持っているようなものだ。

【マッキンタイア】 when a nation has become enslaved, she holds the key which shall unlock her prison as long as she preserves her native tongue. pp.5-6 注はあ

るがフランス語原文のまま。

【レイノルズ】when a people are enslaved, as long as they hold fast to their language it is as if they had the key to their prison. pp.339-340 注なし

母語こそが奴隷となった自分を牢屋から解放してくれる鍵のようなものだ。アメル先生がここでいう国語は、フランス語である。だからこそ、先生はフランス少年たちにフランス語を忘れるな、と教える。そうドーデが書く。「最後の授業」を取り上げるとき、人々がかならずといていくくらいに言及する箇所だ。それほど著名な名物台詞である。

小説の舞台にあてはめると、牢獄とはすなわちプロシア領となったアルザス地方になる。フランス少年たちがフランス語を忘れなければ、いつかは奴隷の身から解放される、というわけだ。フランス語によってフランス人の誇りを維持する。

だが、この引用がくせものだ。

ドーデが使用した字句は、フレデリック・ミストラル (Frédéric Mistral, 1830-1914. 南フランス、プロヴァンス生まれ。プロヴァンス語詩人) から引用したと原文の注に明記してある。ただし、具体的な引用元文献名は書いていない。

背景はフランス国内の言語戦争だ。当時北フランスでのみ使用されていたことばが、異なる言語のフランス南方を侵略しようとしていた。他言語の強制使用だ。ミストラルは、南フランスで使用されていた言語を擁護してそう発言した。北フランス語から自らの言語を防衛しようとしたのだ。そういう動機で発せられた字句なのだという*13。母語にみずからの存在意義を見いだす。

ミストラルが侵略される側にあって発言したことばが、ドーデによって侵略する側のフランス語に置き換えられてしまった。皮肉な話だ。ドーデの考えに従うと、アルザスまで侵略した

フランス語を忘れるな、という意味になる。

そもそもフランス人たちアルザス人はフランス人なのか。ドーデの小説が成立するための前提は、それを不問にすることにある。奇妙なことだ。

胡適は、原作者のドーデになりきっているからなんの疑問も感じないまま以下のように漢訳した。

【胡適】現在我們總算是為人奴隸了。如果我們不忘我們祖國的言語文字，我們還有翻身的日子。6頁

今わたしたちは人の奴隷ということになりました。もしも私たちが祖国のことばと文字を忘れなければ、私たちにまた立ち上がる日がくるのです。

胡適がここに示す「わたしたち」はアメル先生だし、もちろんフランス少年たちアルザス人を包み込む。「祖国」はフランスにほかならない。

先生による文法の授業が終了する。習字の新しい手本は「フランス、アルザス、フランス、アルザス」と書いてある。フランスたちは一生懸命に練習する。

さりげなく書いているようで、用意周到に準備された文章だ。教室にいる少年たちがフランス領アルザスを認めて積極的に肯定していることを強調する。ドーデの巧みな筆さばきを見るところだ。

胡適もここは省略することなく『法蘭西』『阿色司』『法蘭西』『阿色司』(7頁)とくり返している。胡適のこの漢訳は、もともと原文を削除する傾向をもつ。これこそ半分削ってもいい箇所だろう。なぜだか知らないが原文のままにしている。

教室のみんなが懸命に書き写す。それを描写してドーデはかなりの語数を費やした。だがこの一段落を胡適は、あっさり全部を削除した。

省略したつぎの箇所を見てほしい。

フランツ少年はハトが鳴いているのに気がついた。ハトまでドイツ語で鳴くことになるか。

Sur la toiture de l'école, des pigeons roucoulaient tout bas, et je me disais en les écoutant :

《 Est-ce qu'on ne va pas les obliger à chanter en allemand, eux aussi ? 》 p.17

学校の屋根の上では、はとが静かに鳴いていた。私はその声を聞いて、『今にはとまでドイツ語で鳴かなければならぬのじゃないかしら?』と思った。16頁

【マッキンタイア】On the roof of the schoolhouse the pigeons were cooing softly, and I thought to myself as I listened, "And must they also be compelled to sing in German?" p.6

【レイノルズ】On the roof the pigeons cooed very low, and I thought to myself: "Will they make them sing in German, even the pigeons?" p.340

ここもドーデの巧妙さを見せつける箇所だ。それまではハトさえフランス語で鳴いていたことを推測させる。フランス領アルザスは、フランス語が主要使用言語である。ドーデのこの短篇小説における大前提にほかならない。

ところが、胡適は、この重要箇所を含めて全体を削除してしまった。胡適は本当にドーデの意図を正確にくみ取っているのか、と疑問に思うところだ。どこが原文に忠実な直訳なのか。

アメル先生は教壇に坐って周囲をながめている。庭のクルミの木が大きくなり、ホップのつる(houblon / 英訳hop-vine)が伸びている。ホップといえば、ビールだ。ドイツビールを連想する。アルザス地方はビール文化らしい。フランス人のアメル先生はブドウは植えなかったのか。想像と疑問がふくらむ。

胡適は、ホップ(蛇麻草)が理解できなかったのか、それともvine(葡萄樹、藤、葛)の方を取り上げたか、「藤(漢訳は朱藤)」にかえた。誤訳である。

教会の時計が12時を打ち、つづいてアンジェリユス(お告げの祈り)の鐘が鳴った(puis l'Angelus. / 英訳and then the Angelus was heard. / Then the Angelus.)。胡適は、アンジェリユスの鐘は省略した。

アメル先生は黒板に大きく「フランスばんざい! (《VIVE LA FRANCE!》 / 英訳"VIVE LA FRANCE!")」と書いた。胡適漢訳は、こうだ。「在黒板上用力写了三個大字,『法蘭西万歳。』」(8頁)。「黒板に力をこめて『フランス万歳』と大きな3文字を書いた」

漢訳して「法蘭西万歳」だけで充分ではないか。なぜ、原文にない「三個大字」を挿入するのか。目の前の漢字5文字ではないのだ。「五个大字」とすれば、漢訳の整合性を保つことができる。だが、フランス語の3語であることを強調したかった。そうとしか考えられない。余計なことだ。

以上を簡単にまとめる。

胡適が漢訳するにあたって使用した底本は、フランス語原文ではなく、英語重訳だ。証拠1-10により、そのなかのレイノルズ英訳によっていると判定する。ここは重要だ。

漢訳題名にフランス語を添えて「最後一課(La Dernière Classe)」と表示した。いかにもフランス語原文から直訳したように見せかけたのだ。

しかも、のちの胡適は、フランス語に言及し繰り返して強調した。虚偽である。

短篇小説であるにもかかわらず胡適による省略が多い。いくつかの地名を含んだ固有名詞を漢訳しない。リパール、ザール川、アンジェリユスなど。胡適がその場所を知らない、というのならしかたがない気もする。だが、中国人読者には、必要ではないと彼が考えたとしたら、

傲慢である。

漢訳しなかったその中には語り手の少年の名前もある。フランツだ。あるいは鍛冶屋のワシユテルも省略した。削除する基準が不明だ。

鉄戒尺、袍子、打木球、朱藤などに中国化した誤訳もある。原文を尊重した直訳では、ない。

しかも、胡適が短篇小説を漢訳して削除が多いことを見逃すことはできない。

以上を総合して以下のとおりまとめ。

胡適はドーデのフランス語原文ではなくレイノルズ英語重訳本を底本に使用した。しかも、実際に行なった漢訳は、彼が主張する直訳でも逐語訳でもない。大胆に原文を削除し、書き換えている。取り柄は、白話で翻訳したことだけだといっている。

胡適に林訳を批判する資格はない。彼の漢訳を点検して、私は、そう判断する。しかも、胡適が嘘を根拠にして林紘に濡れ衣を着せたことを思い出してほしい。それ以後も、林紘批判をつづけた事実を消すことはできない。

胡適は社会に向かって自分の漢訳「最後一課」が、英訳からの重訳であることを明らかにしたことはない。あくまでもフランス語から直接翻訳したと見せかけた。そのことは、胡適の林訳小説批判と無関係ではない。

外国語ができない林紘は、口述翻訳という間接訳だ。外国語原文からの直訳ではない、と胡適は批判し続けた。その本人が英訳から転訳をしていた。フランス語から直接に漢訳したのではないのだ。その方法において、林紘の翻訳工房とどこが違うというのか。この事実が露見すると、それまで行なっていた胡適の林訳批判は崩壊する。彼が一生涯、虚偽を貫き通した理由である。

胡適は、原文を大きく削除した。だが、基本から見れば著者であるドーデに感情移入し一体化している。ゆえに、作品そのものもつ問題には、まったく気づいていない。

このドーデ作「最後の授業」は、胡適が考え

る西洋の名著のひとつだ。

彼が漢訳して示した名著の中身は、どうなのか。 閉

【注】

- 13) 次を参照した。蓮實重彦『反=日本語論』ちくま学芸文庫2009.7.10。田中克彦『ことばと国家』1981.11.20 / 1994.9.16二十六刷 岩波新書黄版175。府川源一郎『消えた「最後の授業」言葉・国家・教育』大修館書店1992.7.25 / 2003.9.10二刷

清末小説から

野間信幸氏より資料の提供を受けました。感謝します

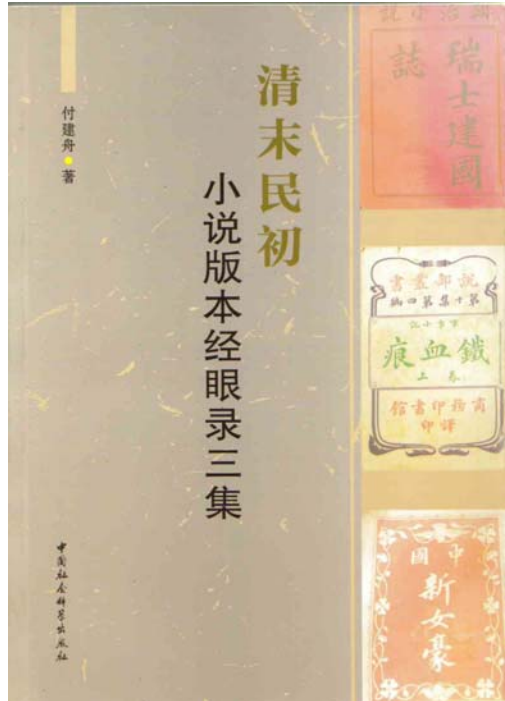


關 文文 『晚清報刊上的翻譯小説』濟南・齊魯書社2013.5

陳 大康 翻譯小説在近代中国的普及 《晚清報刊上的翻譯小説》序 關文文 『晚清報刊上的翻譯小説』濟南・齊魯書社2013.5

- 王 宏志 『翻譯与文学之間』南京大学出版社2011.2 / 2013.7第二次印刷
- 黄人著、江慶柏、曹培根整理 『黄人集』上海文化出版社2001.8
- 岳 立松 『晚清狭邪文学与京滬文化研究』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2013.11 文史哲研究叢刊
- 伍 大福 清末民初李涵秋文言小説補正 『淮陰師範学院学报(哲学社会科学版)』2011年第4期 2011.7.15 電字版
- 洪 九来 20世紀20年代前後商務与中華的出版競争評議 以中華書局“民六危機”為中心考察 復旦大學歷史系、出版博物館、中華書局、上海辭書出版社編『中華書局与中国近現代文化』上海·世紀出版集團、上海人民出版社2013.10
- 周佳榮主編 『百年傳承 香港學者論中華書局』香港·中華書局(香港)有限公司2012.6
- 松田郁子 『恨海』『劫余灰』に描かれた清末女性 守節という处世 『関西大学中国文学会紀要』第34号 2013.3
吳趸人の創作の原点 救亡と‘写情’ 『日本ジェンダー研究』第16号 2013
吳趸人の《社会小説》 ピカ口体験とピカレスク 『野草』第93号 2014.2.1
- 蘇 精 19世紀在华傳教士与印刷出版(1) 出版博物館主辦『出版博物館』2013年第3期(總第23期) 2013.9
19世紀在华傳教士与印刷出版(2) 出版博物館主辦『出版博物館』2013年第4期(總第24期) 2013.12
- 孫 立春 日本近現代小説翻譯史的特徵及其对中国文学的影響 『重慶工商大學学报(社会科学版)』2010年(第27卷第3期) 2010.6 電字版
『中国的日本近現代小説翻譯研究』

北京·中国戲劇出版社2013.1



- 付 建舟 『清末民初小説版本經眼録三集』北京·中国社会科学出版社2013.8
- 卓 玥 “作而優則編”的周瘦鵑 周瘦鵑別具一格的辦刊理念 『出版史料叢刊』2013年第4輯(新總第48期) 2013.12
- 中華書局編輯部編 『中華書局百年總書目(1912-2011)』北京·中華書局2012.3
『中華書局百年大事記(1912-2011)』北京·中華書局2012.3
- 陳 福康 『中国訳学史』上海外語教育出版社2011.10 / 2013.8第二次印刷
- 辻 尚子 変法維新派の刊行物『時務報』『清議報』における標点符号の変化について 佛教大學『中国言語文化研究』第13号 2013.8
- 白須留美 清末の主要な文学期刊誌の発刊詞における小説概念 佛教大學『中国言語文化研究』第13号 2013.8
- 任 百強 『我仏山人評伝』香港·中国評論學術出版社有限公司2010.2 仏山市博物館

- 學術研究叢書
- 任 翔 中国偵探小説の發生及其意義 『中国社会科学』2011年第4期 2011.7.20
電字版あり
 采得百花成密後(代序) 任翔主編
 『江南燕(百年中国偵探小説精選:1908-2011)』第1卷 北京師範大学出版社
 2012.10
- 付 祥喜 『20世紀前期中国文学史写作編年研究』北京師範大学出版社2013.7 国家社
科基金後期資助項目
- 李 默 周瘦鵑《欧美名家短篇小説叢刊》:
“近來記事之光” 錢理群主編『中国現代
文学編年史 以文学広告为中心(1915
-1927)』北京大学出版社2013.5
- 李 昕 論晚清小説翻譯的文学現代性 『西
南大学学报(社会科学版)』第39卷第4期
2013.7 電字版
- 劉永文、陳曉鳴 《時報》:頗具時代特色的小
説伝媒(1904-1911) 『江漢論壇』
2006年第2期 2006.2.15 電字版
- 樂 偉平 清末小説林社的雜誌出版 『漢語言
文学研究』2011年第2卷第2期(總第6
期) 2011.6.15
- 潘 正文 『《小説月報》(1910-1931)与中国
文学的現代進程』北京·人民出版社
2013.11
- 復旦大學歷史系、出版博物館、中華書局、上海
辭書出版社編『中華書局与中国近現代文化』
上海·世紀出版集團、上海人民出版社2013.10
- 民国初年商務印書館与中華書局的人員交往
.....林 盼
試論《中華小説界》在民初文壇的定位 ...蔡祝青
教科書:理想還是生意? 商務印書館与中華
書局的教科書競爭蔡麗麗、王天根
『中国現代文学研究叢刊』2013年第11期(總第
172期) 2013.11.15
- 從《新趣小説》到《熙朝快史》 其作者略考
和文本改編姚達兌
文不原創暫不休:范伯群的不倦追求.....馮 鵠
『中国現代文学研究叢刊』2013年第12期(總第
173期) 2013.12.15
《論“二十世紀中国文学”》与三個“中心主義”
.....劉 俊
《玉梨魂》版權之爭与職業作家的形成...胡安定
夏曉虹著、呂文翠選編『晚清報刊、性別与文化
轉型 夏曉虹選集』
台湾·人間出版社2013.6 晚清文史叢刊1
(代序)深閔·精到·樸茂 夏曉虹的晚清文
史研究呂文翠
梁啟超与日本明治小説
吳趸人与梁啟超關係鈞沈
晚清報紙的魅力
晚清女報的性別觀照 《女子世界》研究
彭小妍主編『文化翻譯与文本脈絡 晚明以降
的中国日本与西方』
台湾·中央研究院中国文哲研究所2013.7 中国
文哲專刊43
《天演論》原著文本的來歷及文化翻譯問題
.....王道還
歸化翻譯的界限 以林紓《伊索寓言》訳本為
例韓嵩文(MICHAEL GIBBS HILL)
林紓与哈葛德 翻譯的文化政治.....李欧梵
福爾摩斯在台湾 日據時期偵探敘事中「翻譯
改写」模式对經典的臨摹与变造.....呂淳鈺
『明清小説研究』2013年第3期(總第109期)
2013發行月日不記
《宦海昇沈録》:一部急就章式的未竟之作
.....王国偉
論晚清小説理論的社会政治主題李亜娟
新旧説部兩搜尋 徐兆璋之小説編研活動及其
相關著述潘建国